



聖徒の道

12 1974

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルパート・L・ステイプレー
リグラン・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキエ
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアズ
ジョン・E・カー
ドイル・L・グリーン
ディーン・L・ラーセン
ダニエル・H・ラドロウ
ヴェール・F・スコット

統一機関誌国際編集局

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)

聖徒の道

日本語コーディネーター
八木沼 修一

聖徒の道11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
海外予約 1,800円

聖徒の道

1974 12月号

も く じ

キリストの贖罪—至高の賜	529	マリオン・G・ロムニー
忘れえぬプレゼント	532	
家族劇場「幼な子が生まれました」	536	メーブル・ジョーンズ・ ガボット
受けることと与えること	538	ロバート・J・マシュエズ
ジョセフ兄弟	540	カール・アーリントン
「逸話集、近代の使徒の生涯より」	544	レオン・R・ハートショーン
——メルビン・J・バラード——		
質疑応答	548, 557	
三つの贈り物	549	エレン・アンハート・ モリソン
世界の子どもたちへ クリスマスのメッセージ	550	大管長会より
クリスマスとローソク	552	リリー・D・チャーフィン
世界のクリスマス	554	
最後の時	558	ハワード・W・ハンター
われらはすべて神のこれまでに 啓示したまいしことを信ず	561	ボイド・K・パッカー
救い主の使命	565	デルパート・L・ステイプレー
証の力	568	ハートマン・レクター・ ジュニア
「わたしは恵みをあなたがたに注ぐ」	572	ヘンリー・D・テイラー
ローカルニュース	574	

キリストの贖罪—至高の賜



第二副管長

マリオン・G・ロムニー

クリスマスの時節が訪れ、イエスの慈悲と恵みへの感謝ということに思いをはせたとき、私の心は贖罪という大いなる贈物を思う気持で一杯になる。そして私の罪を贖ってくださる御方への感謝の気持は高まるばかりである。

連日の報道を通じても明らかなように、人類は罪を犯し、また律法に背くことによって、物理的にも精神的にも多くの苦痛、苦難を招いている。義を守る人々はこのような状態に心を痛めている。彼らは、もし人類がキリストの贖罪を理解し、その祝福を受けられるように自らを備えるならば、そういった苦しみは皆根絶できるということをすべての人々にわかって欲しいと願っているのである。

贖罪には二つの面が考えられるがそのひとつ、死人の中から復活するということはきわめて容易に、しかも非常に広く受け入れられている。パウロはそのことを的を得た簡素な言葉でこのように記している。

「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」(I コリント15:22)

モルモンは、次の聖句にあるように信仰と希望と愛についての偉大な説教からかんがみて、贖罪にはふたつの面があるとみなしている。

「あなたたちは何を望むべきか。よく言うておく。あなたたちはキリストの身代りの贖罪とその復活の力とによって、自分たちがよみがえって永遠の生命を得ることを望むべきである。」(モロナイ7:41)

人は復活するためにキリストを信じる必要はない。「[イエスが言われたように]墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、

善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、

それぞれ出てくる時が来る」(ヨハネ5:28, 29)からである。

私たちが今ここで考えているのは、人に「永遠の生命」を得させる贖罪のことである。復活の中のこの祝福を受けるために復活するまで待つ必要は何もない。アミュレクはニーファイ人にこう告げている。

「私のはらからよ。……道を踏んで悔改めの実を結んでもらいたい。

ごらん、今こそあなたたちの救われる時であって、しかもまたその救いの日である。それであるから、もし悔い改めて心をかたくなにしないならば、偉大な贖いの計画はすぐあなたたちにその効果を及ぼすであろう。」(アルマ34:30, 31)

人がキリストの贖いの中で悔改めという祝福を受けようと自らを備えるとき、その人は神の力によって罪を赦され、霊によって新しく生まれる。彼は新しい人であり、神の属性を身に受けて、「悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを」(モーサヤ5:2)持つ。また彼は良心が安らかになり、その心が喜びに満たされる。(モーサヤ4:3参照)これは、主が次の聖句で言わんとされたことである。

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。

わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:28—30)

もしすべての人がイエスを信じ、イエスの言葉を何の疑いもなく受け入れ、そしてその戒めに従うならば、人の世の様々な問題や悲しみは「旭日の盛なる光に朝霜の溶け去るが如く」消え失せるであろう。(教義と聖約121:11)

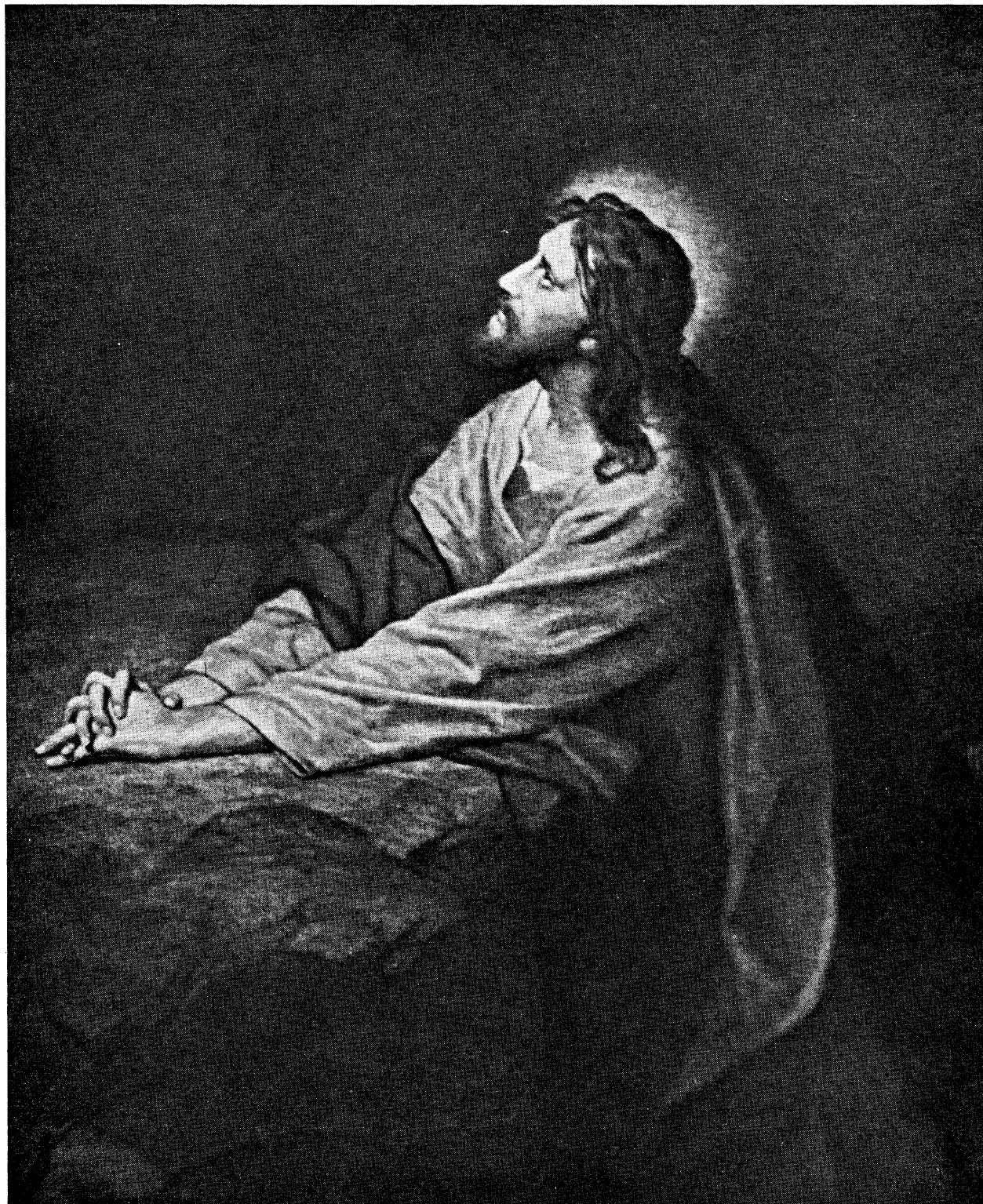
ニーファイ第四書に、以上のことを実行し二百年間平和で幸福な社会を維持した民の記録が載っている。

「第三十六年には、ニーファイ人とレーマン人とを問わず、全地の住民がみな心を改めて主を信ずるようになったので、その間に何の不和争論もなく一人のこらずみな互いに正しく扱った。

そればかりでなく、一同は一切の所有物を共有したので富んでいる者と貧しい者との区別もなく、自由な者と奴隷との区別もなく、誰もかれも自由となり天の賜を授けられた。

民はその心に神の愛を保っていたから、全国に何ら不和がなかった。

また、嫉妬、争闘、暴動、みだらな行い、虚言、人殺し、



および何らみだりがわしい行いがなかったから、まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。」(Ⅳニーフエイ 2, 3, 15, 16)

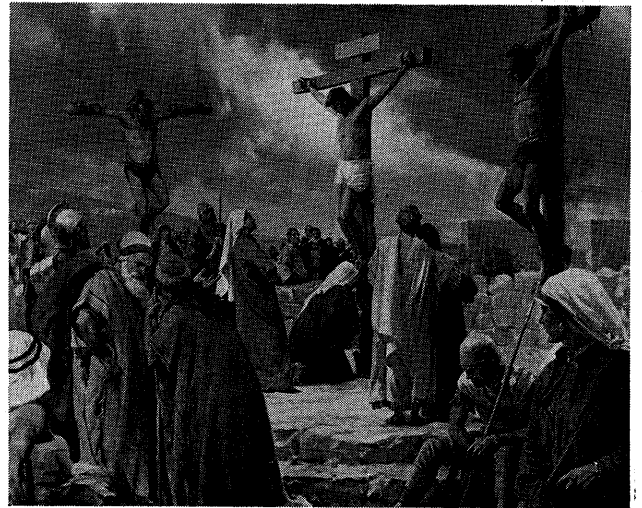
人に永遠の生命を得させるというキリストの贖罪の一面を理解するには、私たちこの地上に住んでいる死すべき肉体を持つ人間は、神のみたまによって教えを受けると同時にサタンの誘惑も受けるということも自覚しておかなければならない。人はだれでも責任を取れる年を過ぎると、ある程度サタンの誘惑に属するものである。しかしただひとり、神の御子イエスは霊にあって肉においても例外であった。

私たちはサタンの誘惑に負けると汚れてしまう。そしてそれが次第に広がってくると、物質的、肉欲的となり、悪魔のようになってきて、最後には神のみ前から放逐されることになるのである。罪の汚れから清められていない者が神のみ前に再び立つことはできない。なぜなら「清からざるものは御父の王国に入ることを得ず」(Ⅲニーフエイ 27: 19) とあるからである。自らの自由意志を行使することにより、神の王国に備わったある場所を自ら失った者はその場から放逐され、自分ひとりの力でいくら努力したとしても再び戻ることはできない。仮に彼らが立ち帰ることになっているとしても、その罪の贖いは追放されなかったある人によってなされなければならない。イエスはまさにその御方であった。

地に住むすべての民は霊において皆「神より生れたる息子と娘」である。(教義と聖約 76: 24) イエスは神の長子であった。前世において霊の子供たちに、肉体を受け試練を受けることが計画されたとき、イエスは神の御子としてこの地上に生を受け、罪のない生活を送るよう選ばれ任命されていた。そしてこの地上におられる間、全人類の罪を贖うため、正義の要求を満たすに足る苦痛を受けることになっていたのである。

紀元前 570 年頃、リーハイはキリストが世に出でたまひ、「真にへりくだった心と悔いる精神のあるあらゆる人たちのために律法の要求する所に応じようとして、人間の罪を贖うために自分の身を犠牲となしたもうのである。メシヤは上に述べたような人々のほかには誰にも律法の要求する所に応じたまわらない。

それであるから、これらの事をこの世に住む人々に聞かせて、聖いメシヤの功德と慈悲と恩恵とに頼らなければ、神の御前に住まえる人が一人もないことを知らせるのは非常に大切ではないか」と述べている。(Ⅱニーフエイ 2: 7, 8)



ヤコブも次のように述べている。

「誰でもみな神の声に聞き従うならば、神はあらゆる人を救うためにこの世に降りたもう。見よ、神はおよそアダムの子孫である者は男でも女でも子供でも、差別なくあらゆる命のある者の苦痛を受けたもう。」(Ⅱニーフエイ 9: 21)

ゲツセマネで苦痛を受けられてから 1800 年後、イエスは親しくひとりの兄弟の名を呼んで、悔改めを説かれた。

「この故に今われ汝に命ず、悔い改めよ。わが口のしもと、わが怒りと、わが憤りとを受けて汝の苦痛甚しからざるがために悔い改めよ。すなわちその痛苦の如何に甚しきかを汝知らず、その如何に強烈なるかを汝知らず、また如何に堪え難きかを汝知らざるなり。

見よ。われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざるがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり。

されど、人もし悔い改めずば誠にわれと同じ苦しみを受けざるべからず。

その苦しむたるや、われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と両つながらを苦しめ、すなわちこの苦きさかずきより吞まずしてしりごみするも可ならんことを欲したり。

然はあれども、父なる神は讃むべきかな。さればわれはこの苦しみをなめ、人の子らの為に準備を為し終りたり。」(教義と聖約 19: 15—19)

イエスがこのような代価を支払われたのは、私たちが信仰を持ち悔改めをすることによって罪の赦しを受け永遠の生命という祝福を享受できる道を備えるためであった。そしてすべてはその贖罪—至高の賜によって可能となったのである。

忘れえぬプレゼント

初めてのクリスマスに天父が世にたまわった賜は、以来民の生活に忘れえぬ影響を残してきた。しかし私たちはどんな贈物を人に与えているだろうか。次に、英国から日本まで各地の聖徒たちが、クリスマスを現実のものとした愛のプレゼントを私たちに語ってくれる。

イタリア、時は1943年

ウォルター・スチーブンソン
英国、ロンドン

およそ似つかわしくないクリスマスを過ごした1943年のあの日ほど、クリスマスの精神を深く感じたことはかつてない。

米国第5陸軍英国師団に所属した私は、当時イタリアにいた。サレルノ上陸以来死傷兵があいついで、相当な数に達していた。12月にはナポリの北をゆっくり進攻したが、寒くてびしょぬれで、ぬかるみがひどく、極度に疲れ、少々ホームシックにかかっていた。あれほど、近づいたクリスマスがわびしく、ほど遠いものに感じられたことは初めてだった。

戦闘が小休止に入ったのを好機に、私たちは小さな農場に腰を落着けた。その地方は戦闘のため荒れ果てて

いたので、農家の表戸をあけて主人夫婦と7人の子供を見つけたときにはびっくりしてしまった。彼らは私たちを招いて夕食のスープをごちそうしてくれた。

農夫は、神が自分たちを守って下さったのだと話した。2歳から14歳までの小さな子たちは、何日も地下室にぎゅうぎゅう詰めで、ふたりの女の子は足が赤くただれ、もうひとり背中をりゅう散弾で撃たれ、父親は腕を負傷していた。家畜の大半は殺され、納屋は焼かれ、馬と食糧のほとんどと家財の一部は退却してきたドイツ兵に奪われていた。石けんも医薬品もなく、食べ物もごくわずかだが、家は無傷で一家は離散もせず、ほかへは移りたくないと言っていた。

私たちは彼らの協力を得て、そこを戦闘司令部にした。私は衛生兵だったので、部隊長から子供たちのためにできるだけのことをするようにと命じら



れた。砲兵中隊全員がその家族のことを気にかけていた。彼らのクリスマスはまったくみじめだろうと思われた。

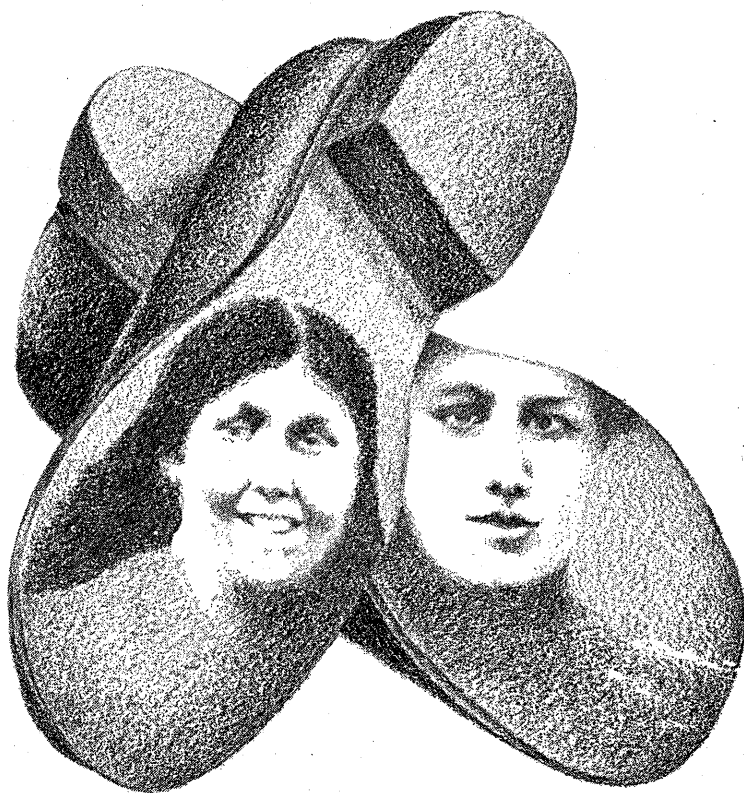
私たちは彼らに内緒で、一家のために貴重な化粧石けんやタルカムパウダーやあめやいろいろなものをかき集めた。小さな木が根こそぎになっているのを見つけたので、クリスマスツリーらしくはなかったが、それを銀紙や色紙で飾りたてた。飾り終わると、ツリーはこれまで見たこともないほどすばらしいクリスマスツリーになった。兵士たちが自分の家族への思いのあったけを込めて飾ったツリーだった。クリスマスイブの就寝時には、子供たちがイギリス人の兵隊とその家族のために祈っている声が聞こえていた。

クリスマスの朝早く私たちが夫婦にプレゼントを渡すと、彼らはうれし涙を流した。その晩の夕食には、イギリス人にとってはクリスマスのごちそうには初めてだというスパゲッティと、イタリア人には初物のイギリス風クリスマスプディングが出た。あのささやかなプレゼントに大喜びした子供たちのこと、抱きあい、キスをしあってどの目にも涙が浮かんでいたことを私は決して忘れられない。一家は英語が話せなかった。私たちもほとんどイタリア語が話せなかった。しかし農夫の乾杯のことばは全員が理解できた。「今私たちの感じている気持がどの人の心にもあったなら、この戦争は起こらなかったものを。」幾人かの兵士にとって、あれが地上最後のクリスマスになり、生き残った私たちにとっては、一番印象深いクリスマスになった。

凍える足と暖かい心と

ニコール・フィローサ

フランス、マルセーユ



マルセーユのその年は非常な寒さだった。どこも氷が張っていた。重い荷物を持っての買物の帰り道、私はアルジェリア人のふたりの少女を見かけた。年の頃は18歳と13歳。小さな子は夏向きのスリッパをはいただけで、足は寒さで真っ赤になっていた。

私は何とかしてあげたい気持ちに駆られ、近寄って行って声をかけた。「靴があるの、あまり上等じゃないけど。でもどなたに差し上げたらいいのか、困っていたのよ。もしよろしければはいて下さいな。」

少女は耳を疑った。「ほんとにわた

しに？いま？」

私はそうよと言い、ふたりを連れて帰宅した。少女が靴をはいてみるとびったりだった。ちょっとの間ストーブのそばで体を暖めた彼女は、クリスマスツリーに感嘆の声をあげた。「こんなにきれいなツリー、見たことないわ。」

その率直さが心にすんなりきて、私たちは旧知の友のようにキリスト教とイスラム教の慣習について話しあったが、そのときは人種も宗教もあんなに違う3人なのに、人間愛以外の何ものも感じなかった。私たちは3人とも神の子供、心にはその思いだけだった。

鉢植えの松

ロジャー・K・ウィリアムス

イラン、シラズ



クリスマスの2日前のこと、ソファァーに腰かけた私たちの心は、私たちの家の土屋根のように重くふさいでいた。

イランのシラズには末日聖徒は私たちしかいないので、妻と私は自分たちで集会を開き、聖典について話し合い「エンサイン」と「チャーチ・ニュー

ズ」を読んだ。そのことによって霊的に高められはしたが、私たちにはほかの末日聖徒との交流が欠けていた。クリスマスの季節に、私たちはそのことを非常にさびしく思った。

外は暗かった。町の物売りやロボの呼びかわす声も、すでに静まっていた。1歳の娘のジェニーは眠っていた。私たちは黙ってすわっていたが、台所のドアの下にかすかな音がして、静寂は破られた。

妻のパムがドアの所へ行ってみて、「まあっ」と小さく叫んだ。「これは何でしょう？」

家主の息子がぐすくす笑いながら、ざわざわと音をさせて、2メートルほどのすらっとした松の鉢植えを運んできたのだ。長いクレープ紙のテープや輪にしてつないだ紙をうしろにひきずって。彼はその木をソファァーの真ん前に置き、テープとチェーンのようにつないだ紙をたぐり寄せて松の枝にかけた。少年の母親と姉がドアの所でっこり笑っていた。

私たちは松の木をじっと見つめた。白、ピンク、ブルー、紫のテープが枝にゆったりとたれ、赤と緑のループがまわりをぐるっと伝っていた。綿の雪が所々の枝に置かれていた。

「どういうことでしょう」と私は言った。

パムはのどをつまらせながら平静をつとめて、「んまあー、とってもすてき！」と言った。

それから、私たちは再び黙って腰をおろした。しかしそれは満たされた沈黙だった。笑みが自然にあふれてくる沈黙だった。私たちの家主一家はユダヤ人なのだ。

キリスト教徒の夜

遠藤孝紀

日本札幌伝道部

以前私は何も考えずにさっさと帰宅していたものだが、今から13年前の、クリスチャンとしてクリスマスを祝った初めての夜は、雪を踏みしめる靴音の一つ一つに耳をすまし、立ち止まっては星を見上げて、そのたびに心に受けたイエス・キリストの知識をかみしめたものだ。

その知識はクリスマスの半年前に、私にもたらされた。金もうけだけを考えていた当時、良友からだしぬけに「遠藤君、いっしょに教会に行ってみたくないかい」と言われたのだ。私は、彼が自分の考えもつかない世界を知っていることにびっくりした。

その年、あの雪の晩に、半年間心にふくらみ続けてきたものを実感として味わいながら、初めてクリスマスを祝ったのだった。それは何にも代えられない贈物だった。その後私は永遠の伴侶を見いだし、そしてクリスマスを4人の子供と共に祝うとき、友から受けたすばらしい贈物のことを思い出すのである。



わたしを巻き添えには しないでくれ

エドナ・M・ジョーンズ

英国、レスター

「今年はうちで子供たちと一緒にだぞ。」10年前のクリスマスに、父さんは息子たちと私にそう宣言しました。「これから毎年、家族みんなで過ごすことになるぞ。1度ぐらい家族だけですぐずのもよいだろう。」

私はすぐに賛成しました。私にとっては、お茶やクリスマスの晩餐につきもののワインを飲まないことで家族や友人と論争するよりも、簡素なクリスマスを過ごすことの方が気楽でしょうから。けれども、その日はもうクリスマス・イブで、私はまだ半信半疑でした。家の中は静まりかえっていました。いつもだったら今頃は人があふれて、ある人はプレゼントをほどこき、ある人は台所で働き、ある人はまだ残っているプレゼントをあわてて包装しながら、しつこく見ないで見ないと叫んでいるはずでした。

やがて全部のプレゼントがツリーの下に並び、食事の用意が整いました。それまでのクリスマスイブには、家族が一番暖かい身なりをして、教区の教会へ深夜ミサに出かけていましたが、その晩、夫は息子たちを連れ出すつもりなのでしょう。

モルモンでいることは容易でありませんでした。その1カ月前、夫はこう言いました。「しなくちゃならないことがあると思うなら、いいよ、やりたまえ。しかしわたしを巻き添えにはしないでくれ。新しい友だちもこのうちには呼ばないでくれ。」

私は、何としてもバプテスマを受けなくてはならないとわかっていましたが、夫のそのような無関心は予想しませんでした。夫が静かなクリスマスを望んだのは、親戚に私のことを説明しなくてよいようにというわけだったのでしょうか。

家族4人が夕食の席に着くと、私は言葉に気をつけながら、「今晚はだれか教会に行くかしら」と聞きました。

夫は「いいや」と答えました。「子供たちとわたしはうちでテレビでも見ようと思ったんだ。」

クリスマスらしくありませんでした。息子たちがツリーを飾ろうとせがんで長男が飾りつけを引き受けたことで、私はほっとしました。少なくとも息子たちはクリスマスを退屈しなかったでしょう。長男はハンダごとと短い針金で何かを作るのに余念がなく、弟はサッカーをやめましたから。

「お母さん、今晚プレゼントを開けてもいいんでしょ」と、12歳の子が聞きました。「ああ、どうぞ、いつもの通りよ。」やがて私たちはさんざん冷やかしたり笑ったり、胸をわくわくさせて、ひとつずつの包みを見つけました。私はじゆうたんに座り込んで、どれを開けたらいいか捜しました。

「ほら、ここだ。」お父さんはそう言って、私のひざに重い包みをのせました。きちんとした長方形の包みで、真白な包装紙の隅に、ばらのリボンが似合っていました。私が気をつけてテーブルをはがしている間に、子供たちは自分の箱の包みをほどこいて、中身を見て喜んでいました。夫は私の手もとをじっと見ていました。

だんだんに、それが紺色の表紙の本

だということがわかってきました。モルモン経、その表題を目にしたとき頭の中をまさかという思いがよぎりました。それはさし絵入りのモルモン経でした。私はその本のことを聞いていましたが、数少ない日曜学校の出席者はみんな私と同じで教会に新しく、どれも持っていませんでした。

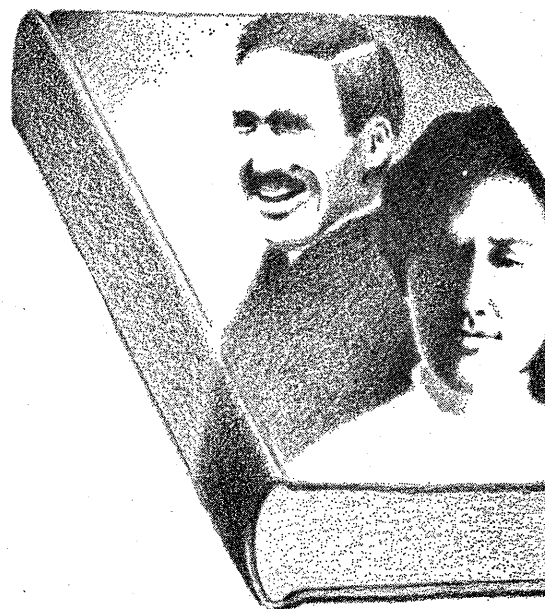
「すてきだわ! ありがとう」と小さく叫んで、「でも、どうしてこれが手に入ったのでしょうか」と聞きました。

すると夫は言いました。「ん——。君が見ていた雑誌にサーリ州の本屋の住所が出ていたんで、非番の昼から車で捜しまわったんだ。」

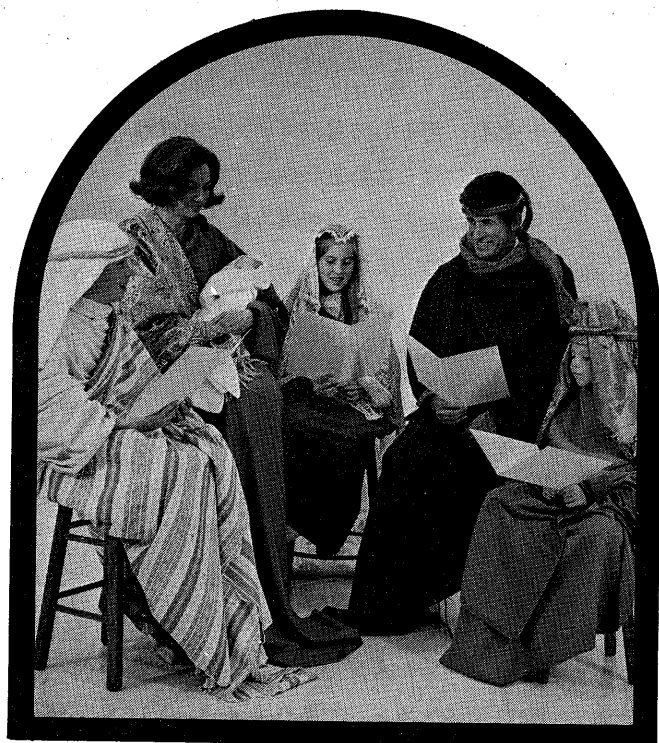
私はあふれる涙を押さえることができませんでした。「まあ、だってあなたは……。」

「君を愛しているからだよ。」夫はやさしく言いました。「君を愛しているからだ。」

注：ジョーンズ姉妹の夫君と下の息子はしばらくして教会に入った。レスターステークヤ部所属で全員活発である。



家族劇場



「幼な子が生まれまして」

作：メーブル・ジョーンズ・ガボット

どのようにすれば、家族が本当のクリスマスの物語に接することができるでしょう。朗読劇場はどうでしょうか。家族が聖書に登場する人々に扮して、ひとりひとりこの聖なる出来事について語りましょう。役をふやしたり、小道具や衣装を用いたり、せりふを変えてみたりしてもおもしろいと思います。可能性は無限にあります。

ヨセフ：

憐れみ深い神よ、マリヤはみごもり
御子が生まれたまいます。
あなたはなんと不思議なことをなさるのでしょう。
なんと賢いことをなさるのでしょう。

み使いが告げたもうた神の御子、
おとめから生まれたもうた神の御子、
まことに、私は彼女を知ることはありませんでした。

マリヤは何と美しいことでしょう。
マリヤには疲労の影もなく、
信仰の光に満ちあふれています。

まことに不可思議なことに、カエサルの命令で
私たちは長い旅路につきました。
「ベツレヘムよ」と聖なる書に書かれている地まで。

マリヤは疲れ、宿もなく
みすばらしいうまやを借りました。
「かくして、すべてが成就されました。」

宿の主婦

しかし部屋はなく、
いくらせがまれても、部屋はいっぱいでした。
マリヤはなすすべもなく、
雑踏の中に立っていました。
マリヤが大きなお腹をしていても
群衆は全くおかまいなし。

私は喜んで部屋をあけようとしたのですが、
飲めや歌えの大騒ぎの中では、
静かな場所はありませんでした。

夫はふたりに出て行ってもらおうとしたのですが、

私はうまやを貸してあげました。
そこは静かで安らぎがあり、
掃除も行きとどいていました。

羊飼いの

私たちはこの丘に立っていました。
私たちは眠らず、羊たちも落ち着きませんでした。

きつと羊たちも、その夜何か普段とは違ったものを
感じていたのでしょうか。

突然、空が輝きわたり、
主のみ使いが、私たちのもとに
降って来られました。

主の栄光が私たちをめぐり照らしたので、
私たちはとても恐れしました。

私は心の中で、そのようなことは
起こるはずはないと、思っていました。
しかし、起こりました。

私たちはみ使いがこう言うのを聞きました。
「きょうダビデの町に、あなたがたのために
救い主がお生まれになった。」
私たちは確かに聞きました。

そして私たちはおびたしい天の軍勢を見ました。
そして、彼らが神をたたえるのを聞きました。

「いと高きところでは、神に栄えがあるように、
地の上では、人々に平和とよき思いがあるように。」

ああ、ベツレヘムへ行って何とうれしかったことでしょう。
布にくるまれ、飼葉おけにねかせてある
聖なる御子、救い主、主なるキリストを見ました。
主は主の民の中に、いやしい身分にお生まれになりました。

マリヤ

御子は生まれたまいました。
長い貴い日々の間、御子は私の血と私の呼吸で
息づいておられました。
今、御子はここにおられます。
御子は完き人の形
私は御子を生みたまつりました。

この子が神の御子だとは、信じる者には奇跡以外の
何者でもありません。
子供の誕生はどれもみな奇跡、信仰と愛の奇跡です。
そして神の奇しき業なのです。

しかし、これよりも大いなることがあるのでしょうか。

ガブリエルは言いました。「それゆえに、生まれ出る子は
聖なるものであり、神の子となえられるでしょう。」

なぜ御子はこのようないやしいところで
お生まれになったのでしょうか。
これから後、神の御子がいやしい人々の間で

生活なさることの先ぶれでしょうか。

おそらくそうでしょう。

しかし、王もこの子の前に頭を垂れ、
博士たちもこの子の言葉を聞き、
幼な子らもこの子を愛することでしょう。

御子はまだ何もなしたまいませんが、
私の使命はすでに終わりました。

世がこの王を受け入れるように。
神の御子は、生まれたまいました。

博士たち

私たちは突然空に輝く星を見ました。
光は速かに、そしてあまねく輝きわたりました。

比類ない大きな星は、私たちをひきつけてはなさず、
東の国から導き出しました。
長い間の勉強と探究の末、私たちは没薬や乳香や金を集め
予言された天の賜を求めて、せき立てられるように砂漠
を越え、川を渡って旅をしました。

「ユダヤ人の王としてお生まれになったかたは、どこにお
られますか。」私たちはたずねました。

しかしヘロデは、その奇跡、その光、その選ばれた御子の
ことについては何も知らないふりをしました。

私が真理を捜していることを知った祭司長たちや律法学者
たちが、「ユダの地、ベツレヘムよ」という言葉を示す
までは。

ヘロデは言いました。「見つかったらわたしに知らせてく
れ。わたしも拝みに行くから。」

そして私たちは、幼な子とその母マリヤを見つけました。
私たちはひざまずき、ひれ伏して拝みました。

その後私たちはヘロデの悪巧みを夢で告げ知らされ、
他の道を通して、遠い故国へ帰りました。

御子は王

私たちは御子の星を東の空に見ました。
私たちはベツレヘムへ行き御子を拝みました。
私たちは、すべての人々を救うと予言されていた王を見ま
した。

ガボット姉妹は、バウンテフルステーキ部バウンテフル第1ワード
部日曜学校の主任教師である。

受けること と 与えること

ロバート・J・マシューズ

クリスマスが近くなると、多くの人は与えることと受けることについて考え始める。クリスマスにお互いに贈物を交換するという習慣が、いつどこで始められたのか、それは定かでない。恐らく、「……また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた」（マタイ2：11）とあるように、幼な子イエスを拝みに東方からやって来た人たちの間で始まったものと思われる。あるいは、イエス御自身が人類への贈り物であり、人類を贖うために御自身の命を捧げられたということに基づいているのかも知れない。

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3：16）

「私はよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。……だけれど、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。……人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」（ヨハネ10：11, 18, 15：13）

パウロは言っている。「……わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ2：20）

ともかく、この習慣の根源が何であれ、今日多くの人がクリスマスに贈物を交換し合うのである。

聖典の中にも、与えることと受けることについて述べている箇所がいくつかある。中でも一番良く知られている聖句は、エペソの長老たちに宛てたパウロの訓戒であろう。パウロは言った。「……『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶している……。」（使徒20：35）私たちは、主のこのみ言葉を書き残したという点において、特にパウロに負う所が大きい。なぜなら、そのことについて私たちはイエスから多くの言葉をたまわっているが、パウロの述べたこの聖句ほどの確かな聖句は現代の聖典のどこにも見いだせないからである。

イエスは弟子たちに、天父は思いやりのある御方であり、神のすべての子らの幸福にこの上ない慈愛をもって関心を示しておられるということを教えられた。

「あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるか。

魚を求めるのに、へびを与える者があるか。

このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈物を知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあるか。」（マタイ7：9—11）

天父は惜しみなく与えたもう御方である。そこでイエスは私たちが慈悲深くあり、互いに、すなわち友人ばかりでなく援助を必要としているすべての人に対して助けとなるべきであると語られた。天父は次のような模範を示しておられる。

「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。」（マタイ5：45）それ故、人もまたたとえ相手が自分の友でないとしても、彼らが「天にいますあなたがたの父の子となるために」よい贈物をしなければならない。

「あなたがたが自分を愛する者〔のみ〕を愛したからとてなんの報いがあるか。そのようなことは取税人でもするではないか。

兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか。そのような事は取税人でもしているではないか。」（欽定訳マタイ5：45—47）

ヤコブも同様のことを述べている。「あなたたちは自分の兄弟を自分自身のように思え。かれらと皆親密にして、…惜まずにあなたたちの財産を与えよ。」（ヤコブ2：17）

人は捧物をするとき、いやいやながら惜しんでするのではなく、喜んでしなければならない。「もし悪い人であるなら、捧物をして惜み惜みするので、捧物をしないと同じこと……と認められる。」（モロナイ7：8）

「惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、……すべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。」（Ⅱコリント9：7）

また、敵の圧制から解放された喜びで祝宴をあげているさい中、古代のユダヤ人は「互いに食べ物を贈り、貧しい者に施しをせよ」（エステル9：22）とさとされた。

しかし、天父が私たちに与えて下さった数多くの賜の中で最もすばらしい賜は御子であり、「一切の善い賜物はキリストから授けられる」のである。（モロナイ10：18）パウロはこのように語っている。

「神の賜物はわたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。」（ローマ6：23）

「しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わ

たしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。」(エペソ 4:7)

「言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝する。」(IIコリント 9:15)

主は予言者ジョセフ・スミスを通じて、さらにこう言われた。

「もし汝善を行わんと欲し誠に終りまで変ることなく忠信ならば、神の王国に救われるべし、こは、神の賜のうち最大なるものなり。およそ、救いの賜に勝る賜はあらざればなり。」(教義と聖約 6:13)

これは神の賜のうち最大なるものではあるが、この現世の生涯を終えた後にはじめて完全に受けることのできるものである。しかし主は、死すべき肉体を持つ間にも受けられる賜があるとされた。それは、聖霊の賜であり、人が肉に在って受けることのできる最大の賜である。ニーファイは聖霊についてこう記している。「聖霊……、およそ神を熱心に求める者たちに神が与えたもう賜である。……すべて熱心に求める者はその求めるものを得、神の奥義は聖霊の力によって、……これらの者に開かれる。」(I ニーファイ 10:17, 19)

万物更新のときに、人は自らが与えたと同じものを受けよう。伝道者は語っている。「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」(伝道 11:1) アルマはこの聖句を次のような言葉で説明している。

「……回復とは悪を悪に、肉欲を肉欲に、悪心を悪心に、善を善に、義を義に、正義を正義に、憐みを憐みに元通りに復すことである。……

お前から出るものはお前にかえる。それであるから回復という言葉はかえって罪人をますます罪があるとして少しもこれに寛く当ることはない。」(アルマ 41:13, 15)

悪い者の上にも良い者の上にも、日は昇り雨は降るが、神の大いなる賜と祝福は、人が神を信仰し罪を悔い改めるまですなわち人にそのような賜と祝福を受ける備えができるまで与えられない。(イテル 12:6—22 参照) この現世において大いなる賜を完全に知らされた後、それを拒む者は、永遠にその祝福を享受することはできないのである。そのような人についてこう書かれている。

「……彼らはまた再び自らの場所に帰り、その受くべきしものを進んで受けざりしにより自ら進んで受くところのものを受くべし。

およそ、人贈物を与えらるるにこれを受けずば何の益あらんや。見よ、彼は贈られたるものを喜ばず、また贈りし人も喜ばざるなり。」(教義と聖約 88:32, 33)

私たちは神の喜ばしい祝福を受けることもさることながら同様に神の懲罰やたしなめも喜んで受けなければならない。

懲罰は姿を変えた祝福なのである。ヨブは数々の障害に悩まされた後、こう言った。「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか。」(ヨブ 2:10) 私たちに経験を与え、また私たちの悪事をたしなめるために、天父は、しばしば私たちを試し鍛えられるのである。ヘブル人への手紙の中に次のような聖句がある。

「私の子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき、弱り果ててはならない。

主は愛する者を訓練し、……わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、……

すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。」(ヘブル 12:5, 6, 10, 11)

私たちはこれまで、神が人に与えられる賜について、また人がそれを受けるためになすべき備えについて述べている聖句を引用してきた。人は進んで主が与えようとされているすべてのものを、仮にそれがさし当たり喜ばしいものでないとしても、喜んで受けるべきである。私たちはまた、人は互いに喜んで良い捧物をしなければならないということも学んだ。しかし人は単に人にのみ与えるべきであって、主に対して何の捧物もしなくてよいのだろうか。主は、人にどのような捧物をして欲しいと望んでおられるだろうか。主は末日聖徒にこう言われた。「見よ、主は真心と喜びて事に従う精神とを求む。」(教義と聖約 64:34) ニーファイ人にもこう語っておられる。

「これより後、汝らは血を流すこと……供うべからず。われはもはや汝らのもろもろのいけにえと火祭とを……廃めよ。これより後、犠牲としてわれに捧ぐべきものは、真にへりくだる心と悔いる精神なり。」(III ニーファイ 9:19, 20)

この意味をよく理解していたパウロは、死んだ動物の犠牲と対比することによってそのことを非常に適格に表現している。

「兄弟たちよ。そういうわけで、……あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。」(ローマ 12:1)

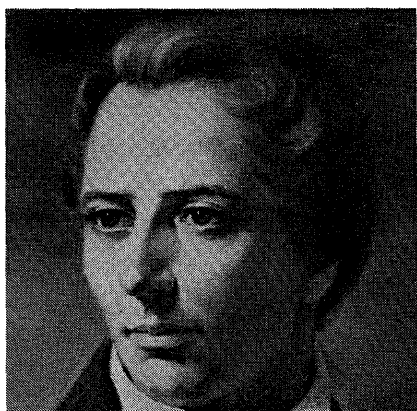
注：受けることと与えることについての参照聖句：ヨハネ 4:10, I ペテロ 4:10, ビリピ 4:15, ヤコブ 1:17, モロナイ 10:8, 17, 30, 教義と聖約 46:7

マッシュューズ博士は、ブリガムヤング大学で古代聖典学を教える助教授である。

ジョセフ兄弟

カール・アーリントン

ウィリアム・ウイタカー画



ジョセフ・スミスには、誠実と熱意で人を奮い立たせる魅力があった。たいがい人は彼を愛し、憎んだ人はわずかにすぎなかったが、そのわずかな人々も農家の少年予言者に会って、感動せずに立ち去る者はほとんどいなかった。彼はすぐれた能力と他人を思いやる心を併せ備えた人だった。天与の徳を有しながらも、常人と同じく世の誘惑にさらされた人だった。

ジョセフ兄弟の比類ない生涯は、片田舎の森で捧げた率直な祈りで始まり、過酷な迫害と靈感による翻訳と癒しや投獄を経験し、1844年カーセージの牢獄で銃弾に倒れ、終りを告げた。

ジョセフ・スミスの福音の教えが広く知られ、研究されている割には、彼の人となりはほとんど知られていない。彼はどんな顔をしていたのだろうか。余暇にはどんなことを楽しんだのだろうか。友として、隣人としてはどんな人だったのだろうか。

現存の信頼できる肖像画はごく少ないが、予言者の外見的特徴を記した著述の中に、その姿形を想像することができる。怒る暴徒に囲まれたときも静穏なスミス家にいるときも、生涯ジョセフの身近におり彼に寄りそい続けたパーレー・P・プラットが、次のような鮮明な描写を残している。

「ジョセフ・スミス大管長は背が高く、堂々としており、活発、頑健である。肌は白く、髪は明るい。碧眼でひげは薄く、彼特有の表情を持ち、………表情は常に穏やかで、話しやすく、知性と慈愛に満ちあふれている。また生き生きとしていて、自然に笑みがこぼれるように見える。いつも元気そうで、顔をしかめたり、自分を抑える風がまるでない。静かで落ち着いた眼差しの中にも、人の心の奥底を見通し、永遠を見つめ、天を貫き、全世界を見抜くような何かがあった。……」(Autobiography of Parley P. Pratt「パーレー・P・プラットの自叙伝」[英文]P. 45) 彼を知る人々の言葉から、ジョセフは天性の指導能力を持った人だったことがわかる。彼は率直で、社交的で、人の心を奮い立たせた。ガーランド・ティッカマイヤー氏の未刊の論文に、ジョセフの性格がこう記述されている。

「彼は直情的、大胆、かつ自信家でその行動は芝居がかった。危険をものともせず、直観によって、五感や

理性で普通にはわかりそうもない新しい並はずれたことを、感じて理解することができた。既存の状況への反発と生来の変革、革新の気性を有し、それによって従う人々の注意を自分の問題から現に携わっている驚異の事業へと転じさせる新しい原則を次々と紹介していった。彼は炎の人で、目的遂行の途上は何ものにも邪魔を許さなかった。」

ジョセフ・スミスの生涯の偉大で重要な側面に目を向けるあまりに、愛と親切をもって人に接したことは見逃される傾向がある。人々の目に映った姿を通してジョセフを見ると、彼の生活が浮き彫りにされる。彼個人の文書には日記、書簡、書類があって、その人間臭いものの言い方は予言者に対して新しい認識を与えてくれる。彼の同僚たちの回想録は、この偉大な指導者を身近にかいま見せてくれ、彼の心の願い、魂のほとばしりがそこに吐露されている。教会記録保管庫にあるジョセフ・スミスの文書には、信仰に対する真剣さ、家族への愛、老若を問わず全人類への愛、楽しみとした娯楽、人生に対する愛着、学問への愛、友人のために犠牲をいとわない心が脈打っている。

リチャード・ブッシュマン氏が予言

者についての論文で指摘している通り、ジョセフの日記には個人の救いを真心から求める彼の信念が彷彿としている。ジョセフの説教は予言的、神学的だが彼は自分でも救いを得ようと努めた。彼は真理を啓示し、勧告し、み業を進める一方、許されることを求め、心の平安と弱点に打勝つための助けを願って祈った。次にあげる1830年代初頭に記した日記の言葉には、彼の祈り深いさまがうかがわれる。「おお、神が私の思いのすべてを導きたまわんことを」、「主は私の家族を祝福し、守っておられる。」中には非常に切迫した記述もある。「おお、主は汝がしもべを誘惑から救い出し、その心を知恵と理解で満たしたもうた」、「多数の会衆はかなりの注意を寄せた。おお神よ、私どもの証を彼らの胸に刻みたまえ。アーメン」、「おお神よ、汝がみ言葉をこの人々の間に確立させたまえ。」

平生ジョセフは自信にあふれ、晴れやかで力強かったが、不安なときもあった。たとえば、「今宵私の心は静穏である。主に感謝する」という日もあれば、「今宵はこの2日間のうちで一番気持が良い。おお、主よ、汝がしもべを誘惑から救い出したまえ」、「心は実に壮快だ。主が共におられる。だが家族について多くの不安がある」とも記している。

ジョセフ・スミスが残した記録の個人文書には、家族を包む彼の愛が鮮明に表われている。彼は日記に幾度も家族への気遣いを記し、手紙には子供のためを思う心情があふれている。獄中に5カ月を過ごしたあと、彼は幾分悲しげにこう書いている。「小さい子供たちがわたしを忘れないようにしてほしい。父親が完全な愛であの子たちを愛していると、暴徒から逃れて帰って来られるように全力を尽くしていると、伝えておくれ。」

また別の手紙では、「絶えず瞑想することといえばこの子らのことだ」と言い、子供との接し方を妻に助言せず

にはいられなかった。「教えられるだけのことを全部教えてあげなさい。あの子たちが善良な心を持った人間になれるように。子供にはやさしく親切にしろ。じれったがらずに、言いたいことを聞いてあげなさい。」ある手紙には、彼が獄内で一人一人の子供のことを思いめぐらしていたことが歴然としている。「ジョセフ坊やには、いい子にならなくてはだめだと言っておくれ。父さんは真底あの子を愛している。一番の兄さんだから、小さい子をいじめてはいけな、かわいがらなくては。フレデリックには、父さんは心から君を愛していると伝えておくれ。あの子はかわいい子だ。ジュリアもかわいい。あの子も愛している。末が楽しみな子だ。あの子に父さんを忘れず、良い女の子になってほしいと伝えておくれ。」そして妻には、「愛するエマ、わたしは永遠に君や子供たちの誠実な真実の友だということを忘れないでいてほしい。わたしの心はとこしえに君を思う。おお、神がわたしたちを皆祝福されんことを。」

予言者に会おうと初めてカートランドにやって来た初期の改宗者が、ジョセフの子供に対する慈愛について、こう記している。

「カートランドでは、人々が子供連れで荷車を連らねて地方から続々と集会にやってくるとき、ジョセフは荷車にそれこそ1台1台出向いて行って、一人一人と真心こめて握手をした。彼はとりわけ一行の中の子供や赤ん坊に目を止め、やさしく手を取っては暖かい言葉をかけて祝福した。彼は無邪気さと純粋さを愛し、片言を話す幼い子供の中にその典型を見ていたようだった。」(*Juvenile Instructor*「ジュブニール・インストラクター」第27巻[英文] P. 24)

また別の姉妹はこのように書いている。「彼は未亡人の私と子供に、暖かい同情と兄弟の親切をいつも示して下さいました。ジョセフ兄弟とエマ姉妹

と馬車に同乗させていただいたときには、小さな私の娘のために馬車から降りて草原の花を摘んで下さったのを覚えています。」(*ジュブニール・インストラクター* 第27巻 P. 399)

1843年、ノーブーの学校に出席したときの経験について書いている人もある。「ある朝予言者の家の前を通りかかると、彼に呼び止められて、学校でどんな本を読んでいるか尋ねられた。私が『モルモン経』ですと答えと、彼は私を家に招き入れ、学校で読むようにと1冊のモルモン経を下さった。私にとっては非常に大切なプレゼントになった。」(*ジュブニール・インストラクター* 第27巻 P. 24)

また、ある少女は家庭集会に出たときのことを。「まだ小さい私は疲れて眠かったので、パパが抱いてくれました。するとジョセフ兄弟が話をやめ、私の足をひざの上にのせるので、私が足を引っ込めると『いいや、そのまま。もっとよく休めるよ』と言いました。」(*Young Woman's Journal*「若い女性のジャーナル」第16巻[英文] P. 558)

マーガレット・マッキンタイア・バーゲスはこう書いている。「彼が私たちの家を訪問して下さいました。朝、私はどの痛みで苦しんでいました。非常にはれて、痛くてたまりませんでした。」そんな彼女を予言者はひざの上にのせて、聖別された油をやさしく注ぎ、祝福した。彼女は癒された。

「別の時に、私と兄は登校途中、ジョセフのれんが屋と言われている建物のわきを通りました。前日は雨が降ったので地面は泥んこで、特にその道はひどい状態でした。兄のワレスと私はぬかるみにはまってしまって、足が抜けなくなりました。子供でしたから当然ですが、泣き出しました。そのまま抜け出せなくなると思ったからです。ところが見上げると、子供たちの大好きな友だち、予言者ジョセフがやって来るのが見えました。彼はすぐに私たちを、高い乾いた地面に引き上げてく



れました。そしてしゃがんで、重くなった靴の泥を落とし、ポケットからハンカチを出して涙で汚れた私たちの顔を拭いてくれました。また、やさしい慰めの言葉をかけて、学校へ行く私たちに喜びを与えてくれました。」(「ジュブニール・インストラクター」第27巻P.66, 67)

ジョセフの他人に対する関心と人のためを思う気持は、ほとんどすべての人が感じていた。彼は大人になってからもレスリングを楽しみ、よくキャッチボールや棒倒しをしたり、青年たちとそのような試合をしたりした。また「約束もしないで」みんなのところを訪問してまわり、冗談を言って仲間を楽しませ、「友だちの中の最も貧しい人と同じ水準に立って行動した。彼にとってよそ者はひとりもいなかった。」他の教会役員もそうだったが、彼はよく肉体労働をした。日記には、溝を掘ったとか旅行客の荷物をマンションハウスに運んだとか、リンゴ拾いをした、庭を耕やした、じゃがいも堀りをした、木を切ったなどという記述が数多く見られる。

予言者の少年や青年に対する関心について、ある人が回想している。「ここで(ノーブー)、少年であった私は予言者ジョセフと個人的に親しくなった。予言者は子供好きで、マンションハウスから出て来て少年たちとよく野球をした。ジョセフはいつもルールを守った。打つ順番がまわってくるまで外野をして、番が来ると実にかがしりした人なので、ノックした球は遠くまで飛び、それをつかんだ者は予言者がごちそうしてくれるぞと、みんなで叫んだものだ。それを聞いて予言者は笑った。ジョセフはいつも人が良く、楽しさいっぱいだった。彼がマンションハウスの事務室でじゆうたんの上に坐り込み、ノーブーの警察官と棒の引き合いをするのを見たこともある。(アロエット・ヘイル, *Autobiography*「自叙伝」〔英文〕P.23, 24)

1831年、ニューヨークで初めてジョセフ・スミスに会ったエドウィン・ホールデン氏はこのように述べた。「1838年のことだが、ジョセフと数人の青年たちがいろいろな屋外スポーツを楽しんでいた。野球をしていてだんだん疲れてくると、彼はみんなを呼び集めて、『さあ、丸木小屋を作ろう』と言った。そして彼らはある未亡人のために丸木小屋を作りに出かけて行った。これがジョセフのやり方だった。いつもできる限りの手助けをしていた。』（ジュブニール・インストラクター」第27巻 P. 153）

ジョン・L・スミス氏がひとつの出来事を述べているが、これはいとこの少年に対するジョセフの愛情を感じさせるものである。1844年6月、殉教する少し前のことだった。ジョン・L・スミスとノーブー軍団の75名は、予言者の要請を受けてノーブーに集合した。ジョンたちはそのとき、ノーブーから数キロ離れたマケドニアに住んでいた。雨が降って、道は悪かった。8人しか馬に乗れず、あとは徒歩だったが、場所によっては腰までつかる水の中を進んだ。

スミス氏は言った。「私たちは昼ごろノーブー付近に着き、神殿に近いフォスター家のレンガ屋敷の正面に駐留した。野営の装備はわき道に置いた。……私が荷物の番をしていると、予言者ジョセフが丸木のところへ馬でやってきて、私の肩に手をかけ、伯父や伯母のことを尋ねた。わたしの手を握って前に引っ張るので、私は丸木の上に登ってしまった。それから馬を横向きにして、私を少しずつ丸木の端近くに引き寄せると、そのとき、私の両足にすりむいて血の出た跡を見つけたので、足をどうしたのかと聞かれた。私は草原の草で靴がボロボロになって足を痛めたが、すぐに治るだろうと返事した。顔のところに持って行った彼の手が濡れているのに気がついて、見上げると彼の頬を涙が伝っていた。彼は私の頭

に手を置いて、「坊や、神さまが祝福して下さいよ」と言い、団の中で同じようなけがをしている人はいないかと尋ねた。私は大勢いますと答えた。ジョセフは、ラスラップ氏が店の戸口の所にやって来ると、彼に向かって言った。「この人たちに靴をあげて下さい。」ラスラップ氏が「靴はありません」と答えると、ジョセフはすぐさま「それではブーツを」と言った。

それからジョセフは振り向いて言った。「ジョニー、団は解散して帰郷する。わたしは知事に保護されて、裁判のためにカーセージへ行く。」そして片手を私の頭に置いたままかがみ込んで言った。「恐れなくていいんだ。イスラエルが平和の勝利を収めるのを君は見るところだ。」（エドウィン・F・パーリー *Stories about Joseph Smith* 「ジョセフ・スミスについての逸話」〔英文〕 P. 126-128）

「1837年夏のある夜、ジョセフと私はオハイオ州の小さな町ペインズビルへ向けて馬車を駆り、夕食を共にしようとして友人の家で馬を止めた。すると食事もそこそこのうちに、外で騒動が始まった。暴徒が集まり、怒りの叫びを上げて殺してやるとおどしているのだ。家の主人に、ジョセフと私を引き渡せと要求している。しかし主人は私たちを裏の戸口へ導き、闇に乗じて逃してくれた。そのすぐ後で暴徒はたちが逃げたのを知り、通り道と思われる道に追手を放ち、かがり火をたいて見張りを置き、周辺を捜しまわった。

しかし、ジョセフと私は要路を避けて、道からはずれた森や湿地を歩いた。かがり火が役に立った。ところがまもなく逃げている最中に私はよろけ出した。具合が悪く恐怖のせいもあって、力が抜けたのだ。ジョセフは、私を残して暴徒の手に渡すか、私を助けて身を危険にさらすか、ふたつにひとつを決めなければならなかった。彼は後者を選び、私を広い肩の上にかついで、泥と闇の中を時々休みながら運んでく

れた。それから数時間して、私たちは人っ子ひとりいない道の上に出て、やがて無事に帰りつくことができた。ジョセフの腕力のおかげであれだけのことができた、私の命が救われたのだ。」（同上）

パーレー・P・プラット兄弟は長い幽閉の期間をジョセフと共に過して、彼の豊かで研ぎ澄まされた霊性を知った。彼は、家族から引き離されて困難にある予言者を見、後には大志ある勇敢な指導者として彼を見た。プラット兄弟はジョセフの人柄を次のように生き生きと語っている。

「彼は高潔、大胆で自主独立の性格を持ち、打ちとけた親しみやすい態度だが、叱責は獅子のごとく恐ろしく、慈悲は海のごとく深かった。万事にわたる知恵と雄弁のほとばしる言葉は、学びもせず訓練も受けず得たものである。教育によって磨き上げられたり、技巧によって洗練されたりしたものではないが、生まれながらの素朴な調子で口から流れるのであった。言い方といい、話すことといい、実に種々様々で豊かであった。」（*Autobiography of Parley P. Pratt* 「パーレー・P・プラットの自叙伝」〔英文〕 P. 45, 46）

ジョセフは自信という利点を持っていたが、謙遜な心を合わせ持ち、調和が取れていた。彼は聡明な思索家、語学者でありながら、学歴に乏しく、つづり方は不得手だった。深い霊性を持ちながら、しかつめらしい謹厳さの印象は与えなかった。彼は自らの開拓者という背景を神よりの召しと結びつけて、宗教の新時代の確固たる地盤を築いた非凡な宗教指導者だったのである。

「逸話集，近代の使徒の生涯より」

※レオン・R・ハートション編「逸話集，近代使徒の生涯より」
(*Exceptional Stories from the Lives of Our Apostles*) ソ
ルトレーク・シティ，デゼレト出版社，1973年，許可を得て
転載。

メルビン・J・バラード長老

略歴

バラード長老は1873年2月9日，ユタ州ローガンで出生。父はヘンリー・バラード，母はマーガレット・マックネイル・バラード。

バラード長老の父親は，39年有余ローガン第二ワード部の監督を務めた。

1896年，教会は伝道活動の新しいプログラムを試みた。

B・H・ロバーツ長老が合衆国の主要都市を巡る説教者に召され，澄んだテノールのジョージ・D・バイパーと，バリトンの美声を持ったメルビン・J・バラード，オルガニストのエドワード・P・ミグレーが，召されて同行した。

1909年3月1日，バラード長老はオレゴン州ポートランドに本部を置く北西諸州伝道部の伝道部長に召された。

10年間伝道部長を務めたあと，1919年1月7日，ヒーバー・J・グラント大管長から使徒の聖任を受けた。45歳のときである。

1925年，南米へ伝道。

1939年7月30日死亡。



「お父さんにあげて
おくれ」

(1884年5月) 18日，ワード部会員の神殿推薦状を書いているユタ州ローガンのヘンリー・バラード監督の家の外には，教会員が列をなしていた。うららかな日中で，ヘンリーの9歳の娘エレンが外の歩道で友だちとおしゃべ

りしている。そこへ，通りのなかほどから年輩のふたりの男の人が近づいてきた。そしてひとりが，「おじょうちゃん，おいで」と呼びかけた。エレンがもじもじしていると，その見知らぬ人は彼女をさして「そこのおじょうちゃん」と言い，エレンの手に新聞を握らせて言った。「これをお父さんにあげておくれ。ほかの人じゃだめだよ。さっ，早く行って。なくさないようにね。」

ヘンリーの妻のマーガレットがそのあとをこう話している。「エレンは帰ってきて，主人を捜しました。お父さんは(推薦状書きで)忙しいから，わたしが新聞を渡してあげるわと言うと，エレンはこう言うんです。『だめよ。あの人は絶対にお父さんに渡してと言ったんですもの。』ですから，エレンに自分で新聞を届けさせました。」

ヘンリーは事態をすぐに察した。そのイギリスの「ニューベリー・ウィークリー・ニュース」で，中にはサッチャム墓地発表の死亡者名簿が掲載され

ていた。しかもそこにはヘンリーと父親の今は亡き知人たちで、60名位の名前と系図上の細かい記録が出ていたのである。新聞をもってきたのは一体どれだろうか。すぐさまエレンに尋ねてから、ヘンリーは外に飛び出しあたりを尋ね歩いてみた。人家のまばらな開拓地で、お互い知らぬ人のない所だというのに、近所の人はだれもふたりを見ていないと言う。ふたりはついに見つからずじまいだった。彼らが消えてしまったことも不思議だが、それよりもさらにびっくりしたのは、新聞の日付だった。1884年5月15日。航空機が発明されるよりずっと昔の、郵便でさえイギリスからアメリカ西部まで数週間もかかるという時代に、この新聞はわずか3日でここに着いたのだ。

その翌日、バラード監督は新聞を持ってローガン神殿のメルル神殿長のところへ行き、事の次第を説明した。神殿長はこう断定した。「バラード兄弟、幕の向こう側にいるだれかが、自分たちのために儀式をしてもらいたがっているのですよ。この新聞をあなたに届けば儀式をしてもらえと思ったのでしょう。それをするのはあなたです。あなたが主の使者から新聞を受け取ったのですから。」バラード家の者たちは非常に喜び、新聞から書き取った死者全員のために、神殿で代理のバプテスマとエンダウメントを受けた。「かの人は、その休日の散策でこのような偉大な業が可能になったことを生涯知らずに過ごしたのであった。」

「そのお方はわたしを 腕に抱いて口づけし」

主は生きておられることを証する。主が犠牲を払い、贖罪を整えられたことを、わたしは知っている。主はわたしにそれをかいま見る特権を与えて下さった。

私は、主の死と十字架と復活を胸に強く印象づけた2年前のある経験を思い出す。決して忘れられない経験だった。私はそれを今晚あなたがた少年少女に証したい。誇る心ではなく、喜びと感謝の気持で。私は主が生きておられることを知っている。人は主によって救いを見いだすべきこと、私たちが主のみまえに行って正しいとされるように霊的に成長する手段として、主が与えて下さった恵みあふれる犠牲を決して無視できないことを、私は承知している。

はるかフォートベックのインディアン保留地で、数人の兄弟と共にインディアンに伝道していたときのことである。自分たちの働きに関するある事柄を決定するにあたって主の導きを求め、主からみこころにかなうことをしていると証を受けたいと願っていた。そうしたある晩のこと、私は夢を見た。神聖な神殿の建物の中にいる夢だった。祈りと喜びのひとつきが過ぎると、私はある部屋に入って栄えあるお方にお会いする特権を与えられると知らされた。その部屋の入口を入ると、ひとときお高い壇上に、かつての目で見

たり永遠の世界におられると想像した以上の、この上なく輝きに満ちたお方が座っておられるのが見えた。どなただろうかと近づいていくと、そのお方は立ち上がり、両手をひろげながら私の方に進んで来られた。そしてほほえみながらやさしく私の名を呼ばれた。私がこの先たとえ百万年生きても、あのほほえみは決して忘れはしないだろう。そのお方は私を腕に抱いて口づけをし、しっかり胸に抱きしめ、それから私を祝福された。骨の髄まで溶けてしまうような思いだった。それが終わると、私はそのお方の足もとにひざまずき、涙と口づけの雨をあびせた。そのお方は世の贖い主でそのみ足にはくぎあとがあった。万物を手中に収めるお方のみまえに出た気持、そのお方の愛と慈悲と祝福を受けた気持は、もしあの経験ができるなら、あのときの気持をまた味わうために、自分のすべて、自分の願いのすべてを捧げようと思うほどだった。

「広い心も張り裂けん ばかりに」

神は独り子を世のために死なせるほどに世を愛して下さったこと、そして神を信じ、さらにその戒めを守る者はだれでも救われることが、聖典に書かれている。しかしその犠牲に、私たちは大した値を払わなかった。それらの栄えある特権はすべて惜しげもなく与えられている。私は教会の立派な著述

家がこのような言葉を書いているのを思い出す。「悪魔の小部屋では何でも売っている。くずの1グラムも金1グラムの値段がする。」(J・R・ローウェル *Vison on Sir Launtal* 「ロンファル師の示現」)

犠牲となるのは天だけである。求めただけで得られるのは神だけである。その贖い、その犠牲に私たちがおそらくは何も代価を払わなくとも、だれかが何かを払っている。考えてみたい。私たちを救い、この世で私たちを霊的に養い、永遠の世で神と共に住むための用意をさせようと、世の贖いのために命を落とした、それほどまでに世を愛した天父の尊い御子、愛する御子をわたしたちに送るにあたって、天父はどんな値を払われたのだろうか。

アブラハムの子イサクのいけにえの話を読むとき、御父が御子を世に遣わすのにどんな値を払ったかをわたしたちに教えようとしておられると、私は思うのである。アブラハムの息子は長く待ち望んだあげくに与えられ、立派な父アブラハムから何にもまさる宝とされたこと、しかしアブラハムは喜びの最中にそのひとり息子を主にいけにえとして捧げよと言われた話を思い出されることだろう。アブラハムはそれに応じた。そのときのアブラハムの胸中を想像できるだろうか。あなたはアブラハムと同じように息子を愛しているだろう。しかしアブラハムの事情を考えれば、彼の愛情はいっそう大きかったに違いない。母親のサラから息子を連れ出し、別れを告げたときの彼の心中はどのようなであっただろうか。自分の母に別れの言葉を告げて、いけに

えに指定された場所へ3日の旅に出発するイサクを見て、アブラハムの胸中はいかばかりであっただろうか。別れに際して、深い悲しみをこらえるだけで精いっぱいだったに違いない。アブラハムは燔祭のたきぎを背負ったイサクと共に、指定された地まで3日間徒歩の旅をした。彼らについてきたふたりの若者にはそこにいるように言って、アブラハムと息子は山に登った。

息子は父に言った。「父よ、火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか。」

自分を信頼しきっている息子の、いけにえを忘れてきたのではないかと聞く言葉は、父アブラハムの胸を刺したに違いない。哀れな父は約束の子をみつめて、「神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と言うだけであつた。

彼らは山に登り、石を集めて、たきぎを並べた。そしてイサクの手足を縛り、祭壇の上に載せた。父として、アブラハムは息子に別れの口づけと祝福と愛を与えただろう。この苦悩のときに、アブラハムは父の手にかかって殺される息子に後ろ髪を引かれる思いだったに違いない。することはすべて終わり、いよいよ刃物が抜かれ、血のほとばしる一撃をと手を振り上げたそのとき、主の天使の声をした。「それで充分である」と。

私たちの天父はそれと同じ、またそれ以上の思いをされた。天父の場合は振り上げた手が止められなかったからである。御父は御子イエス・キリストをアブラハムがイサクを愛したよりもさらに深く愛された。なぜなら、私たち

の救い主である御子が永遠の世界で長い年月忠誠を尽くし、信頼と榮譽を受けて御父の傍らに住み、御父は御子を深く愛しておられたというのに、御父は愛する御子に、無数の敬愛を受けた榮譽と栄光の中から地上へ人知を越えた天下りをさせたもうたからである。御子は汚辱と雑言といばらの冠を受けに地上へ下られた。神はあの悲痛と苦悩のとき、あの園で体中の毛穴から血の汗をしたたらせて、「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけて下さい」と叫んだ御子の声を聞かれたのである。

あなたがたに聞こう。どの父、母が自分の子供がこの世で苦悩の叫びをあげるのを聞きながら、助けの手を何ら差し伸べずにそれを傍観できるというのか。自分はひとかきも泳げないというのに、おぼれた我が子を助けようと逆巻く流れに身を躍らせた母親や、愛する者を助けようと炎に包まれた建物に飛び込んだ母親の話を聞いたことがある。

私たちはそれらの叫びを、動じずに聞き流すことはできない。主は私たちに、自分で自分の命を救う力を与えはしなかった。主は私たちに信仰を与え、私たちは必然の力に従う。しかし主は救う力を持っておられ、御子を愛しておられて、命を救うこともできたのである。御父は群衆の侮蔑から御子を救うことも、ふたりの囚人の間で十字架にかかったイエスが「十字架からおりてきて自分を救え。他人を救ったが、自分自身を救うことができない」とあざけられているとき、その御子を救うこともできたはずである。御父はそれ

らすべてのことを聞いておられた。御子が責められるのを見、エルサレムの町を十字架を引いて歩き、重さに力尽きた様を見られた。やっとカルバリの丘に登る御子を見、両手を広げて木の十字架につけられるのを見、手足に釘を打ち込まれ、打つごとに皮膚がさけ肉がちぎれ、鮮血がしたたり落ちるのを見られた。天父はそれを見ておられた。

御父のときは刃物が止められずに振り下ろされ、愛する御子の血が流された。私たちの救い主である御方が絶望のあまりに「わが神、わが神どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ぶほどになっても、御父は悲嘆にくれ苦痛にさいなまされながら、愛する御子をながめておられた。

その間、幕の向こうでは、もうそれ以上は耐えられないという思いで、その死闘を見ている愛する御父の姿をありありと思い浮かべることができる。また、死んでいく子供に別れを告げ、最後の苦しみを見ないようにと部屋から連れ出される母親のように、御父は頭を垂れ、宇宙の片隅に身を隠し、広い心も御子への愛で今にも張り裂けんばかりであったらと思う。ああ、その瞬間、御父は御子を救うこともできたというのに。私たちを見捨てはされなかったことを、感謝したたえまつる。御父は御子を愛すると同時に私たちを愛しておられたからである。御父が御子をさえぎらず、私たちを愛するがために御子の苦しみを見過ごしにされ、御子を救い主、贖い主として私たちに与えて下さったことをうれしいと思う。御子なし、御子の犠牲なしでは、

私たちは取り残され、栄光を受けて御子のみ前に行くことは決してできなかったであろう。御子を人類に賜として与えられたことの、天父の払われた値の幾分かは、このことなのである。

「あなたの息子になる前にわたしの息子だった」

主は私たちをみもとに召す権利を持っておられないのだろうか。私たちは何よりもまず、主の息子、娘ではないのだろうか。ひとり息子の死に、どうしても承服できなかったある父親のことが思い出される。山間でのある日、彼は私に、「なぜ私の息子を、私の希望であり誇りであるあの子を私から取り上げたのですか」と主に尋ねたときの経験話をしてくれた。そのとき、みたまのこういうささやきが聞こえたという。「彼はあなたの息子になる前に、私の息子だった。あなたが彼をいかに愛しても、私はそれ以上に彼を愛した。しかしあなたが忠実ならば、彼をあなたに返してあげよう。」そして父親は納得をした。神に第一の権利があることを了解したのである。神が私たちを召されるとき、「主が与え、主が取り去る、主のみ名に栄えあれ」と言うのが、私たちの本分なのである。それが私たちにできるすべてである。もしそれを願ったなら、私たちはどの悲しみにも打ち勝ち、勝利のかちどきをあげることだろう。ただ自分をその摂理に従わせることさえできたなら、心に平安を得るだろう。

「お母さん、私を 忘れないで」

霊界の人たちがこの地上の神殿で私たちの行なう仕事を知っているひとつの証拠として、カナダのアルバータ神殿のウッド神殿長の語った話がある。神殿長が数人の子供たちを両親に結び固めていたとき、儀式の最中に、そこにいた母親に聞いてみたい気持ちに駆られて、「姉妹、このシートには子供たち全部の名前が載っていますか」と尋ねた。姉妹は「はい」と答えた。神殿長は儀式を始めたが、また途中でやめて、本当に子供たち全員の名前が載っているかどうかをもう一度尋ねてみた。彼女は、ほかに子供はいませんと返事した。神殿長は儀式を進めようとしたが、またも尋ねてみたい気持ちがした。「姉妹、このシートに載せるのを忘れたお子さんはいませんか。」すると彼女は言った。「ああ、今思い出しました。赤ちゃんを亡くしたんです。生まれてすぐに死んでしまった子です。その子の名前を忘れていました。」その子供の名前が長子として一番最初に書き加えられ、子供全員が両親に結び固められた。

そのときウッド神殿長は言った。「子供を結び固めようとするたびに『お母さん、わたしを忘れないで』という声がするので、どうしても先に進めなかったのです。」そのたびに声がして、ついに漏れが発見されたのだった。

質疑応答



他人を尊重すること、権威ある人たちを尊敬することを、子供にどうやって教えたらいでしょうか。

解答／ダーネル・ソリンガー

ブリガム・ヤング大学育児学専任講師

子供が他人を尊重するように教える秘訣は、そのような態度は自己を尊重する気持から生まれることを認識させることです。私たちは模範によって教え、子供たちを自分の子供として、また永遠の兄弟妹姉として尊重していることを示さなくてはなりません。

尊重という原則を実行するための方法を少しあげてみたいと思います。

1. 子供の言うことに耳を傾ける。
子供が何かを言いに来てきたときは、真剣に聞いてあげて下さい。言いたいことが終わらないうちにあなたが用事でどこかへ行かなければならないときには、ただ黙って行ってしまわないように。その事情を説明し、もう少しあとで話を全部聞きたい、と言うことです。あなたが子供の言うことを大事に

考えていることを、ぜひわからせて下さい。

2. 子供の力を信頼していることを示し、実際に責任を与える。いったん子供に責任を与えたら、少々時間がかかっても思ったより下手であっても、最後までやらせることです。娘に食事の支度を頼んでおこげを作っても、失敗を何とかカバーする時間を与えて下さい。飛んで行って、自信を失わせるようなことはしないで下さい。
3. 子供に意見や助言を求める。それによって、自分の考えは大事なものと感じることでしょう。どうしたら早く家に帰れるか、庭にどの花を植えようか、おかずは何にしようかと助言を求めたら、さっそくそれを取り入れて下さい。
4. 自分の言動の基準やきまりを、時間を取って説明する。子供に日常生活の原因結果を理解させることです。子供は、これ以上はだめという限界を知り、あなたかだれかが決めたその限界の許された範囲内で、自由意志を使って成長できなくてはなりません。両親が時間を取ってきまりを説明してあげれば、「盲従」から抜け出したときに、子供はさらに気持よくそれを守ることができるものです。
5. 自分の失敗を認める。自分の失敗を認めたら子供が尊敬してくれないと考えるのは間違いです。全く逆の場合が多いのです。
6. まず自分が権威を尊重する。指導者の役職にある人を批判しては

いけません。子供が家に帰って監督や日曜学校教師に不平を言ったら、子供と監督や教師のどちらもけなさずに、筋道たてて批判に答えてあげて下さい。

ここにあげたのは子供の自尊心を育てるためのほんの数例にすぎませんが、始めはこれで充分です。子供が自分は愛され、尊重されていると知ったら、その愛と尊重をほかの人に返すのはずっと簡単です。



アダム・オンダイ・アーマンで神殿用地がすでに奉獻されていますか。

(教義と聖約78:15)

解答／リランド・ジェントリー博士
セミナー、インスティテュート部門
カリキュラム専任

アダム・オンダイ・アーマンとは、将来再びアダムがそこで子孫を管理する場所、初期の教会指導者が、アダムやニーファイ人が礼拝の祭壇にした場所と認定した敷地のことを言います。

聖徒たちが、たとえ数カ月間アダム

557ページに続く

質疑応答

548 ページより続く

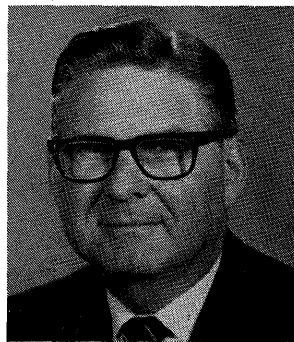
・オンダイ・アーマンにとどまっただけであっても、その町に神殿が立つことを願ったのは疑いのないことです。

神殿用地の奉獻について一番はっきり述べているのは、ヒーバー・C・キンボールです。「そこにいた間に、私たちは丘陵地帯にひとつの町を設計し神殿区画の4隅にあたる場所に杭を打ち、奉獻した。ブリガム・ヤング兄弟が代弁者となり、300人から500人の男が銃を携えて出席した。この丘陵地帯は、グランド・リバーの水面から75メートルから150メートルほど高く、視界の限り西から東、北、南と眺望することができた。かつて見たうちで最高に美しい場所のひとつだった。」(Life of Heber C. Kimball 「ヒーバー・C・キンボールの生涯」の中でオルソン・F・ホイットニーが引用したもの。P. 209)

アダム・オンダイ・アーマンの設計に関しては少なくともふたつの地図が見つかっています。最初のは測量地図の原図で、町の中央に2丁にわたって公共用地が取っていますが、神殿用地は見あたりません。2枚目のはセントジョージ神殿の古文書の中から最近になって見つかったのですが、手書きのままの地図で、神殿の敷地や初期の住居の位置やその他のおもだった用地が書き込んであります。

聖徒たちは1838年の数カ月間その土地を占有しただけで、非教会員から迫害を受けて、やむなくそこを逃げ出しました。脱出までにわずか2、3軒の家が立っただけでした。

現在この地域はミズーリ州デービス郡にあり、以前と同じく農地になっています。



妻と私は主の什分の一の戒めに完全に従いたいと思っていますが、何に基づいて納めるべきかよくわかりません。お教えて下さい。

解答／ビクター・L・ブラウン
教会管理監督

モルモン経にはアブラハムがメルケゼデクに什分の一を納めたと書かれているので、古代に什分の一の律法が守られていたことがわかります。その律法はこの神権時代に、教会に再び確立されました。1839年7月18日にミズーリ州ファーウェストで予言者ジョセフ・スミスに与えられたその啓示は、教義と聖約第119章の3節から4節に記録されています。

「これを以てわが民が為す什分の一の始めとなすべし。まずこれを為して後、かくの如く什分の一を納めたる者は、以後毎年彼らの得る全利益の什分の一を納むべし。」

1970年3月19日に、大管長は「正しい什分の一とは何か」という質問に答えて、次の書簡をステーク部長、伝道部長、ワード部監督、支部長に送りました。

「この事柄に関して、知り得る最もわかりやすい声明は、主御自身の、教会員は年間の全利益、すなわちそれは

全収入と解されるが、その10分の1を納めるべきであるとの宣言であると、私たちが一様に返答したことを御承知願いたい。これ以外のどんな声明をだれが出そうと、正しくはない。私たちは、自分がどれだけのものを主に負っているか、従ってどれだけ納めるかを自分で決定する権利が全教会員にあると考える。」

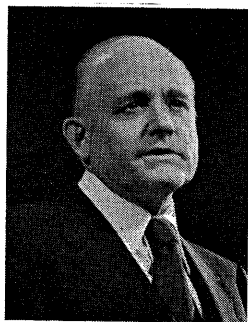
毎年年末になると、教会員は全員監督から什分の一の面接を受けなければなりません。このときに、什分の一を完全に納めているか、一部納めているだけか、全く納めていないか、話します。什分の一はその人と主との間の問題なのです。監督は主のしもべとして捧げ物を受け取り、報告するだけなのです。

主は、什分の一と捧げ物を納める人には天の窓を開くと約束されました。マラキ書の中にこう書いてあります。

「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一とささげ物をもってである。あなたがたはのろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである。わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:8-10)

もし主に対してまったく正直であったなら、心に平安と落着きを感じ、自分は什分の一を完全に納めていると自覚することでしょう。

什分の一は、自分で受けたいと思う祝福をもとにして納めて下さい。



最後の時

「世の救い主、イエス・キリスト」

十二使徒評議員会会員 ハワード・W・ハンター

今から2000年近く前、人類史上最も重要な週の最初の出来事が、エルサレムに近い小さな村、ベタニヤで展開された。この地方での、3年間のつらい伝道を終えられ、ナザレのイエスは、親しくしていたマリヤ、マルタ、ラザロの家を後に、意を決してエルサレム城門の方に歩いて行かれた。この古代の市の中に、イエスのことを神を冒瀆する者、悪霊にとりつかれた者、ユダヤの律法を犯す罪人、と考えている者もいたが、このイエスこそ予言者でありメシアであり、生ける神の子だと確信している人々もいた。人がどう思おうと、権威と権能をもって教えを説いておられたこの御方が、律法学者でもパリサイ人でもないことを、すべてのユダヤ人は認めていた。

「さてユダヤ人の過越の祭が近づいたので、多くの人々は身をきよめるために、祭の前に、地方からエルサレムへ上った。人々は、イエスを捜し求め、宮の庭に立って互に言った。『あなたがたはどう思うか。イエスはこの祭にこないのだろうか。』」(ヨハネ11:55, 56)

ユダヤの法律は、この最も神聖な記念式典に、すべての成人男子の参列を義務づけていた。しかし議会の議員たちはイエスの死刑を公言していたので多くの人々は、まさかイエスが公衆の面前に姿を現わすとは思っていなかった。

イエスはどこにあって、その身が危険にさらされていることを感じておられた。しかし、敢えて過越の祭を祝いにエルサレムに上って来られたのである。しかも、華麗さや厳かさとはほど遠い、謙遜と平和の象徴である貧弱なロバに乗られて。大勢の群衆は、イエスを歓迎するためにエルサレムを出て行き、シュロの木の枝を道に敷き、叫びつづけた。「ダビデの子に、ホザナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。」(マタイ21:9)

マタイはそのときの状況を次のように記している。「……町中がこぞって騒ぎ立ち、『これは、いったい、どなただろう』と言った。そこで群衆は『この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである』と言った。」(マ

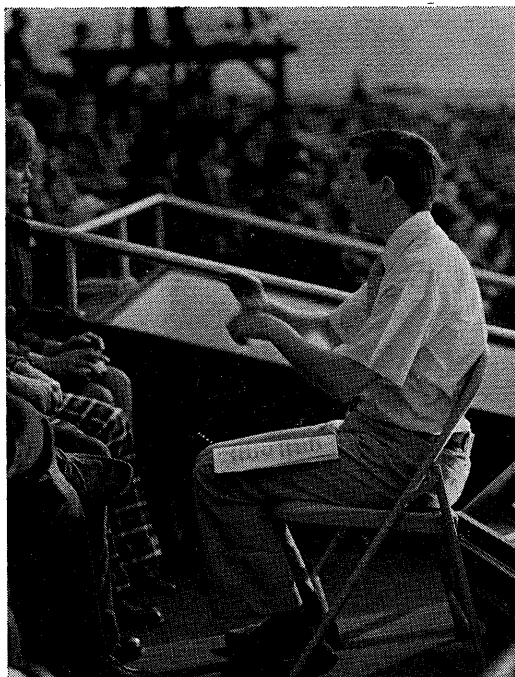
イ21:10, 11)

律法を知っていたすべての人々にとって、これこそ、昔から予言者が予言し、イスラエルの子孫が待ち焦がれていた、イスラエルの王の凱施なのである。群衆は歓喜し、口々に叫んだが、イエス御自身は黙っておられ、さながら王のようであった。イエスは、天父がこよなく愛しておられたエルサレムに近づくと、涙を流して言われた。「いつかは、敵が周囲に塁を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。」(ルカ19:43, 44)

イエス御自身も、身に差し迫った運命を感知しておられた。それは、実らすためには枯れなければならない穀物があることや、殺されると知っていながら、先に殺された父の僕の代りとして、おどろ園につかわされた息子のたとえ話を語られたことからわかる。そして、その重荷にくず折れてしまいそうになられたこともしばしばであった。

「今わたしは心が騒いでいる。……父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。」(ヨハネ11:27)しかし、このイエスを前進させたのは御父のみ旨を完うしようとする一意専心、不撓不屈の心であった。

主はその命が風前の灯と化したときでさえ、静かにこう言われたのであった。「わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである。」(ヨハネ12:46)このような言葉は、結果として敵を結束させることとなったが、それでもなお続けて言われた。「わたしは自分から語ったのではなく、わたしをつかわされた父ご自身が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったのである。」(ヨ



ハネ12：49)

どうにかして言葉のわなにかけようとして、イエスに反対する人々の中で最も奸智に冴けた者たちが、政治およびラビ語法典の双方に関係する難問をふっかけた。パリサイ人、ヘロデ党からなるグループが、次のような悪意に満ちた質問をしたのである。「……先生、わたしたちはあなたが真実なかたであって、真理に基いて神の道を教え、……知っています。……答えて下さい。カイザルに税金を納めてよいでしょうか。いけないでしょうか。」(マタイ22：16, 17)

もし肯定すれば、ローマの律法のもとにしいたげられていたアブラハムの子孫にあたる人々から、その受け継ぎを放棄したかどで非難されることは必至であったし、また反対にもし否定すれば政治扇動者として、直ちに逮捕されたであろう。しかしイエスの答えは、そのどちらでもなく、ただ税に納める貨幣を見せるように言われ、その貨幣を詰問者たちの前にかざしながら、「これはだれの肖像、だれの記号か」と言われた。無論、その辺の子供にでも一目瞭然に分かるものだった。「カイザルのです」と彼らは答えた。このような簡単な質問で、イエスはこの対審の

指導権を握られ、その貨幣を返しながら「……それでは、カイザルのものは、カイザルに、……返しなさい」(マタイ22：20, 21)と言われた。いわゆる「貨幣にその人の名と肖像が彫まっているのなら、それは合法的に持主である彼に返してやるべきである」と言うことである。イエスはこのようにして圧制者の企てを見事にくつがえされたが、そのようにすることが、決してイエスの本来の使命ではなく、また望みとすることでもなかった。彼らもまたイエスの救いの対象となる人々であるからである。

イエスはたとえ彼らが敵意に満ちていようと、彼らを気づかい、愛された。彼らが立ち去ろうとしたとき、イエスはこう願って言われた。「神のものは神に返しなさい。」貨幣にカイザルの肖像が刻印されているように、彼らも含め、すべての人間には、天父なる神の肖像が刻印されているのである。人間は神にかたどって創造され、イエスは彼らが神のみもとに帰れるように道を備えられた。それにもかかわらず、「彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残し立ち去った。」(マタイ伝22：21, 22)

それからしばらくして律法学者が、

神学のことでイエスを罠にかけようとして言った「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか。」

(マタイ伝22：36) 律法学者たちは、モーセの律法の原典を細分化し、再細分化し、緻密なまでに分類化し過ぎたために、かえってある部分は、他に比し全く正反対の意味になってしまっていた。しかしイエス御自身は、このような法律論争には、微塵もしばられることがなかった。救い主の次の一言は律法のコルを貫くものであり、再分化されたものをひとつの完全な形に総合するものであった。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』」(マタイ22：37-39)

このようにしてイエスは、悪意、ねたみ、狡猾に満ちた質問に、愛、哀れみ、高邁な理想の形でお答えになられたのであった。この地上での使命ももはや終りを告げようとしていたとき、イエスは群衆の前から立去り、弟子たちを励まされ、これから起ころうとすることと関して警告された。またエルサレムの崩壊のこと、さらに末の日の再

降臨の前に起こる苦難や背教などについて話された。また長い間、遠方の国に行き、家を留守にしていた主人が帰って来て、りっぱな目的のために投資するようにと与えたそれぞれの能力や才能をどの程度伸ばしたか、しもべたちと一緒に数えあげてみるだろうという話もされた。そして羊飼いが羊を山羊から分けることも言われた。

羊とは、飢えている者に食べさせ、渴いている者に飲ませ、裸でいる者に着せ、悩める者を思いやる人々のことである。またイエスは婚宴の場に来ているおとめたちのことについても話された。花婿が来るのが延びたが、彼女たちの幾人かはあかりをとすに十分な油を持っていた。しかし他のおとめたちは、油が底をつき、あかりが消えるのをただ眺めているだけであった。このようにしてイエスは、弟子たちに目を覚まして祈れと教えられた。しかしこれは、寝る間も惜しんで願い求めよと言うことでもなければ未来のことだけに没頭せよと言うことでもない。むしろ、イエスは現在なすべきことに沈着かつ十分に心を配り、着々と進むことを望んでおられたのである。

さて、犠牲の時が刻一刻と近づいていた頃、イエスは十二使徒と共に、だれにもわからない、静かなある二階の間に退かれた。

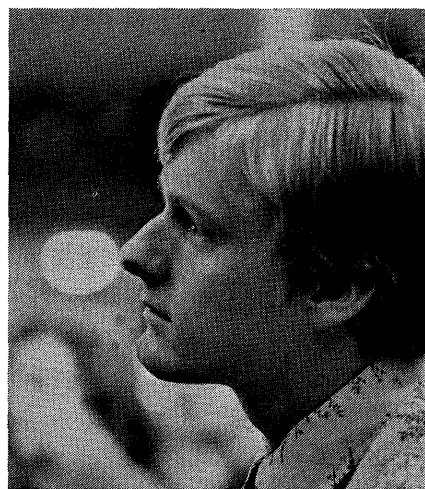
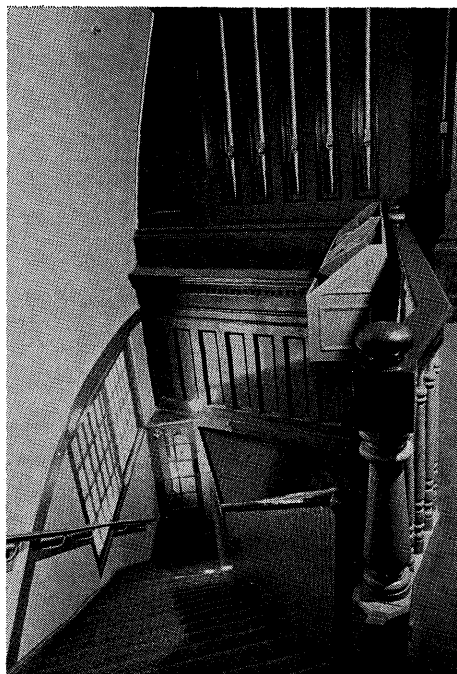
そこで主は、特別な証し人であるこの使徒たちが悪の誘惑に打ち勝つことができるようにと、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、使徒たちの足を洗われた。この崇高な愛と一致の行ないは、この後に続く過越の晩餐の前奏曲として全くふさわしいものであった。

この過越の晩餐は、パロがかたくなであったためにエジプト全土に広まった破壊の手から、信仰篤きイスラエルの子孫の長子たちが「過越させて」いただいたとき以来、象徴さらには儀式として、イスラエルの民の間で忠実に実行されて来た。過越というこの古代の御加護の誓約を実行している中で、平穩無事の象徴であり、御自身の体と血の象徴である聖餐をイエスが教えられたということは、何と時宣を得ていたことだろう。イエスは、パンを取り、それを裂き、また盃を取り、それを祝福した際、霊の糧と永遠の救いの道をもたらす神の子羊として、御自身を捧げられたのである。

新しい誓約は新しい戒めをもたらす。イエスは弟子たちに命じて言われた。「互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、……それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」(ヨハネ13:34-35)

この世での生涯がまさに終わろうとするときまで、イエスはその雄大な霊と偉大な力を示された。イエスはこの時に至っても、自らの悲しみに心を奪われたり、間もなく訪れようとしている苦難に思いをめぐらしたりはされなかった。従ってきた愛弟子たちの現在、また将来のことを案じておられたのである。平安というものは、個人にとっても教会にとっても、お互いの無条件の愛のもとにのみ保たれるものである。イエスはそのことを承知しておられた。イエスの全精力は、彼らが必要としていること、すなわち今まで教えられていた訓戒を実際の模範を通して教えるということに注がれていたように思われる。そしてイエスは弟子たちに、慰めと戒め、そして警告の言葉を与えられた。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。……わたしの父の家には、住まいがたくさんある。……あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから……わたしは道であり、真理であり、命である……。わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。……わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送っていつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。……わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなた



がたのところに帰って来る。……あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である……これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。」

(ヨハネ14章, 15章より)

最後の夜に数人を伴ってゲツセマネの園に近づいたイエスは、言語に絶するような大きな使命を前に気を強く持っていられるよう、御自身のために祈ってくれと、使徒たちに願うこともできたかも知れないが、それよりもイエスは彼らのために、彼らと同じように御自身に従われた人々のために祈られたのである。その場に合わせ、その祈りを聞いたヨハネは次のように記している。

「……わたしが願うするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪(しき者)から守って下さることです……彼らも世のものではありません。……真理によって彼らを聖別して下さい。……わたしは彼らのためばかりでなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためです。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにさせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためです。」(ヨハネ17章より)

本当に心うたれるこのとりなしの祈りを終え、イエスは肉体と霊の苦痛にひとり立ち向かうために進んで行かれた。主イエス・キリストの近代の十二使徒のひとり次は次のように記している。

「ゲツセマネの園におけるキリストの苦悶は、その熾烈さはもちろんのこと、その目的ということについて考えても、人間の心では計り知れないものがある。……イエスはその苦悶のとき

に……サタンの加えることのできるあらゆる恐怖に立ち向かい、これに打ち勝った。人間には理解ができないが実在する非常に現実的なある方法によって、「救い主」はアダムからこの世の終りに至るまでの人類の罪を自身に引き受けたもうたのである。」(ジェームズ・E・タルメージ「キリスト・イエス」P. 613)

イエスが無実のうちに告訴され、不法に裁判され、処刑されるのはもはや時間の問題であった。しかしイエスは何人たりとも成し得なかったことを実行されたのであった。すなわち、墓から甦られたのである。墓は再び世の光と生命に満ち、イエスは父のみもとへと昇って行かれた。死に打ち勝ったナザレのイエスは、今や救い主イエスとなられたのである。

性急さに忙殺されている現代の生活に比べ、イエスの生活はいかに単純素朴であり、粗末な環境のもとにあったことか。イエスを取り巻いていたのは高慢な世の権力者ではなく、貧乏人、賤しい人々、謙虚な人々であった。そしてその生活や教えに複雑なものは何ひとつなかった。イエスの語られた言葉は、当時耳を傾けて聞いた人々、また現在耳を傾けて聞くすべての人々に影響を及ぼすのである。

歴史は今、イエスの死を証明するに足る証拠を提供してくれる。私は、イエスの死を確信していると同時に、かつてこの世に生を受けた人々、またこれから生を受けようとする一人一人の「救い主」として、イエスが今も生きてましますことに対して、静かな、しかしながら強い確信を抱くのである。昔の過越の週に入るに際し、生ける神の生ける御子、復活されたイエス・キリストのことに思いをはせようではないか。イエスのみ名のもとに、心をひとつにし、互いに愛し合い、戒めを守るよう願うものである。イエス・キリストのみ名により、アーメン。



われらは、すべて神の
これまでに啓示した
まいしことを信ず

みたまを通して問い、正し
い生活を送ることによって
主の啓示を吟味しなさい。

十二使徒評議員会会員
ボイド・K・パッカー

今朝、愛するロムニー副管長は聖霊というテーマで啓示について話して下さったが、私は副管長の言葉からとても大きな励みを得た。皆さんもそう感じたことと思う。

情勢の定まらない世にあって、啓示が絶えず教会に下されていることを私は神に感謝している。

また、啓示が予言者にのみ限られていないことも感謝している。教会幹部も受けることができるのである。さらに世界各地の教会指導者から、何かを決定するときや、もっと光明を知識を必要とするときに導きを与えられているという話をいつも聞く。

また父母たる者も靈感と啓示を受け、事実ロムニー兄弟が話して下さったその力を通して家族を導くことがで

きる。当然のことながら、私たち一人一人が、ふさわしく生活するならば、みたまとの交わりを持ち個人的に導きを受けることができるのである。

過去の予言者は彼らの受けた啓示を記録してきた。そして、それを受けるに至った神聖な歴史と共に、聖典の中に記している。もちろん、その最もよく知られた例は聖書である。私たちは教会において、ほとんどの人がもはやしなくなったことをしている。私たちは聖書を読んでいるのである。

また他の聖典すなわち啓示の書にも恵まれている。モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠がそれである。

聖書以外の聖典があると公言するときに、私たちは次のように尋ねられることだろう。「では、これらの啓示はどこから得たのですか？ これらの書はどこから与えられたのですか？」

これらの質問に答えようとして、私たちは、古代の予言者が作った記録をウリムとトミムを使って翻訳したことをすぐに話す。また、神のみもとから送られてきた天の御使いの訪れについて話し、さらに何のためらいもなく、主御自身が現われたもうたことを話す。

すると多くの人々はこれらの説明が何か奇妙な物語であるかのように考え、表面的にさえそれらを真面目に受けとろうとはしない。そして聖書の時代には当然であった啓示が、今日の時代にも与えられているという考えを否定するのである。

それでもなお、これらの聖典は存在する。私たちはそれらをどこからか得たのである。そこで言う。「手に取って、読んでみて下さい。そして試し、自分で調べて下さい。」けれども不幸なことに、ほとんどの人は試してみようとさえしない。

これらの人々は、ヒュー・ニブレー博士が数年前に書いたあるたとえ話の中の人々のようである。そのたとえ話を一部引用したいと思う。

「ある時、ひとりの若者が畑を耕していて、大きなダイヤモンドを見つけた。そこで彼はそのことを人々に話した。そして、人々にただその石を見せ、みんなはそれを認めた。ところがひとりの心理学者が、みんなのよく知っている事実を例にとって、その若者は妄想に陥っていると説いた。またある歴史学者は、以前にも何人かの人々が畑でダイヤモンドを見つけたと言ったが、それがうそだったことを説明した。さらに、この地方にあるのは水晶だけで、ダイヤモンドなど全くないと言う地質学者も現われた。若者が見つけたのは水晶だと言うのである。そしてその地質学者は、その石の検査を頼まれると、大儀そうに何も言わず、ただ微笑を浮かべて静かに首を横に振って断わった。また言語学の教授は、その若者がその石を指して使った語が、ほかの人々がダイヤモンドの原石を指して使っている語と全く同じものであることを証明した。従って彼は単に、その当時の人々が共通に用いていた言語を使っていたと言うことになる。さらに社会学者は、4大都市の花屋の店員合計177人の内、その石が本物であると信じたのはわずか3人であると言った。その石を見つけたのはその若者ではなく、誰かほかの者であることを説くために書物を著わした牧師もいた。

最後に、ひとりの貧乏な宝石商が、石の鑑定をまだ終えていないので、ダイヤモンドかどうか確実に名の通った鑑定人に頼んで調べてもらい、答えを出したらどうかと指摘した。だれがこの石を見つけたか、その発見者は正直で正気かどうか、だれが彼を信じるか、彼はダイヤモンドとレンガの区別ができるかどうか、ダイヤモンドが畑から見つかったのかどうか、また人々が水晶やガラスをダイヤモンドと見誤ったかどうか、これらはすべてダイヤモンドかどうかと何の関係もないのである。そこでダイヤモンドの鑑定人たちが

が呼ばれた。ある鑑定人たちはそれが本物であると言った。しかし他の者たちはそれをひどい冗談だと取って、そのことに真剣に取り組むことで自分の威厳と評判を危くすることのないようにした方がよいと言った。こうした中で悪い影響を残すことがないように、ある人が、その石は実際にはとてもよくできた人造のダイヤモンドであるという説を出した。しかし、作り事に変わりはない。これに異議を唱えるならば、農夫の若者が良質の人造ダイヤモンドを造ることは、本物を見つけることよりも、はなはだすばらしい功績であるということである。(Lehi in the Desert and the World of the Jaredites,「砂漠のリーハイとジェレドの世界」, [英文] P. 136, 137)

私たちがこれらの聖典を持っていることは事実である。繰り返すが、私たちはこれらをどこからか得たのである。

多年の間、これらがどこから得られたかについて数多くの解釈と意見が出されてきた。しかも提議されたこれらの説はそのほとんどが、これらの書をそれほど読んでいない人々によるものである。さらに、ジョセフ・スミスがそれらを作り、彼自身がそれらを著わした。従って彼はその非難を受けなければならない、という考えを持った人々によることがほとんどである。

しかしこのことは彼にはるかに大きな信望を与え、実際よりも大きな功績を持たせることになる。私はこれを受け入れることはできない。なぜなら、このことは彼を測り知れない天才に仕立てることになるからである。彼がそうであったとは思わない。彼が何の助けも受けず、神の導きなしにそれらを創作したと考えることは、不合理なことである。

事実は明瞭である。それはジョセフ・スミスが神の予言者であり、それ以上の者でも以下の者でもないことである。

聖典はジョセフ・スミスから与えられたというよりはむしろ彼を通してもたらされたものである。彼は啓示が与えられる仲立ちとなった。それ以外の点では、古代の予言者たちや近代の予言者たちと同様に、彼も並の人間である。

これらの啓示の書は偽りである、その証拠に、初版以降、聖典の内容に変更が加えられていると主張する人々がいる。彼らはこれらの変更部分を引用して、あたかも彼ら自身が啓示を宣言しているかのように、ここに偽りの証拠がたくさんあると言う。あたかも、それらの啓示について知っている唯一の人であるかのように。

もちろん、変更や改正の加えられた部分はある。少し調べただけでもそれがわかる。しかし、正しく検討すればこれらの改正は、異論ではなく、むしろその書が真実のものであることの証となるのである。

予言者ジョセフ・スミスは、学問のない、一介の農家の息子であった。彼が若い頃に書いた手紙を読むと、綴りも文法も、また語法もあまり洗練されていないことがうかがえる。

そのような彼を通して、文学的にも味わいのある形で啓示がもたらされたということは、全くの奇跡である。そして引き続き多くの点で改善が加えられたことで、それらを尊ぶ気持は増すばかりである。

ここで、これらの変更は基本的に、文法、語法、句読点、明文化の点で最小限文章を洗練したものにすぎなかったことを強調しておきたい。従って根本の原則は何ら変わっていない。

では、そのことがなぜ広く告げられていないのだろうか。その理由は明らかである。比較してみたところで何の意味もなく、全く取るに足らないので話す必要がないからである。とにかくこのことは、これらの書が真実のものか否かに全く何の関わりも持っていない

いのである。

古代の予言者モロナイは、多くの啓示を編集した後、次のように語っている。「もしこの記録の中に足りない所があれば、それは人間の欠点によるものである。しかし、私たちはこの記録に何ら足りない所を見出さない。けれども、神はすべてのことを知ったもうからこの記録を非難する者は慎んでその考えを捨てよ、そうでないとおそらく地獄の火に投げ入れられるであろう。」(モルモン8:17)「すべて…この記録に記してあることよりも偉大なことを知るであろう……」(モルモン8:12)

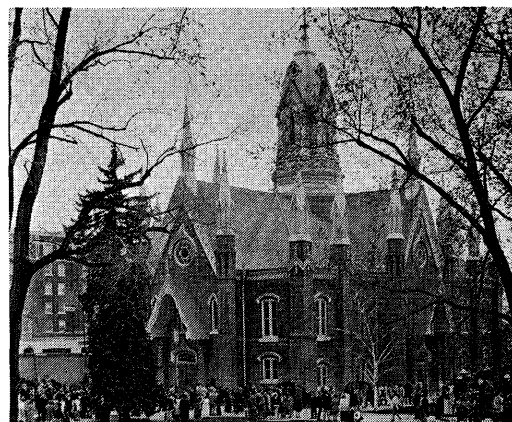
人はある石を取り上げて、それが何かを正しく確認するために、粘板岩あるいは砂岩であることを確認する検査を行なったとする。そしてこの検査の後、「ダイヤモンドであることは認められなかった」と言って調べるのを止めたとする。

たとえそれが正しくても、彼の得た結果は、それがダイヤモンドかどうかを何ら明らかにするものではない。数多くの検査を行ない同じ結論に到達するかもしれないが、誤った方法を使った場合、それは確認できない。

彼が正しい方法に従ってその石を検査するとき、ただそのときのみ、正確な結論を得ることができるのである。それまで、「ダイヤモンドであることは認められなかった」という彼の結論は、何ら価値のないものだと言えるであろう。

長年の間、限りなく大勢の人々が、これらの啓示を正しい方法によらずに調べてきた。そして彼らは一様に、パウロの語った言葉を証明している。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受け入れない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。」(1コリント2:14)

これまで述べてきたように、これら



の聖典のダイヤモンドは、その検査に耐えるものである。ダイヤモンドのための検査にそれをかけたら、そのダイヤモンドが本物かどうかわかるのと同じように、確かに聖典もそのための検査にかけることができる。

非常に確実な方法がある。しかしこれを用いるためには、批判から霊的な問いかけへと心の態度を変えなければならない。

聖典を調べるのに、あいまいな態度で、さらには不誠実な気持ちでとりかかり、何も得られずに止めてしまう人々がいる。これは、彼らが備え、受けるに足る分そのものしか得られなかったためである。もしあなたがそれを、あいまいな問いかけや、無益な好奇心、あるいは善意から出たものだが一時的にすぎない探求に応じるものだと考えているなら、それは誤りである。同様に、狂信家に応じるものでもない。

誠実なへり下った心で静かに人生を過ごすときにこそ、人は確かなものを知ることができるのである。真理にまつわる多くの要素は、人生の備えができて始めてもたらされる。

しかしそれらの証がもたらされるのは非常に早い。老若を問わず多くの謙遜な人々がこのような証を持てるという可能性を軽視してはならない。多くの人々は現に、学問や科学の分野で得られる知識にまさる証を持っている。謙遜な人がみたまを通して問い、正し

い生活に基づいて得た証を述べるとき、彼がその他の点では無知であるからといってその証を否認したりせず、それに心を配りなさい。

学界で巨人と言われる人でも霊的に小人とみなされる人が多い。そのような人は、通常倫理的にも虚弱である。そして、神のみ業を減ばそうと、すぐに自ら破壊者の一員になり下がるのである。不節制、不敬、不道德な人、破壊的で、その地位にいる値のない人の証に気をつけなさい。

予言者ニーファイはこう言っている。「……罪のある者は真理が胸の底まで刺しつらぬくために真理を残酷だと思ふのである。」(Ⅰニーファイ16：2)

またこの予言者は語っている。「書く時には話す時ほどの力がない。それは、人が聖霊の力で語るときには、聖霊がその話を人の心の中に浸りこませるからである。

しかしながらごらん、世の中には聖霊に対してその心をかたくなにする人が多いから、聖霊はこれらの人々を感動させることができない。従ってこれらの人々は書き記してある多くのことを捨てて、これを価値のないものと見なす。」(Ⅱニーファイ33：1，2)

さらに彼は、自分の書き記してきた言葉は、人々に善を行なうように勧めるものであると言っている。「イエスのことを教え、またイエスを信じて終りまで堪え忍べと説き勧めている。イエスを信じて終りまで堪え忍ぶならば永遠の生命を得るのである。

私の書いた言葉は真理をはっきりと語って罪惡をきびしく咎めるから、惡魔のような精神の者でないかぎりには、誰も私の書いた言葉を怒らないであろう。」(Ⅱニーファイ33：4～5)

新約聖書に、私たちが心に留める価値のあるひとつの警告がある。ペテロと他の使徒たちが議会によって監禁された。しかし天使により解放された。その後また議会に連れて来られた。そこで彼らは証を述べた。「わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた、その証人である。」(使徒5：32)

議会のある者たちは使徒たちを殺そうとした。しかし、律法学者ガマリエルは、次のような賢明な発言をした。「イスラエルの諸君。あの人たちをどう扱うか、よく気をつけるがよい。」(使徒5：35) それから、ふたりの説教者の例を引用した。「この人も滅び、従った者もみな散らされてしまった。」

そしてガマリエルは忠告を与えた。「あの人たちから手を引いて、そのなすまにしておきなさい。その企てやしわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。

しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできない。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない。」(使徒5：37—39)

啓示は教会内に存続している。教会のためには預言者がそれを受けておりステーキ部のためにはステーキ部長が

いる。伝道部、定員会には伝道部長、会長がいる。ワード部には監督があり、家族には父親がいる。そして、個人は自分のために啓示を受ける。

これまで多くの啓示が与えられてきた。そしてそれらは、進み行く主のみ業の中にはっきりと見いだされる。おそらくいつの日か、これまでに与えられ、記録されてきた他の啓示が出版されることであろう。このように私たちは神が「神の王国につきて多くの偉大にして重要なことを啓示したもうこと」(信仰箇条第9条)を信じ、待ちもうけているのである。

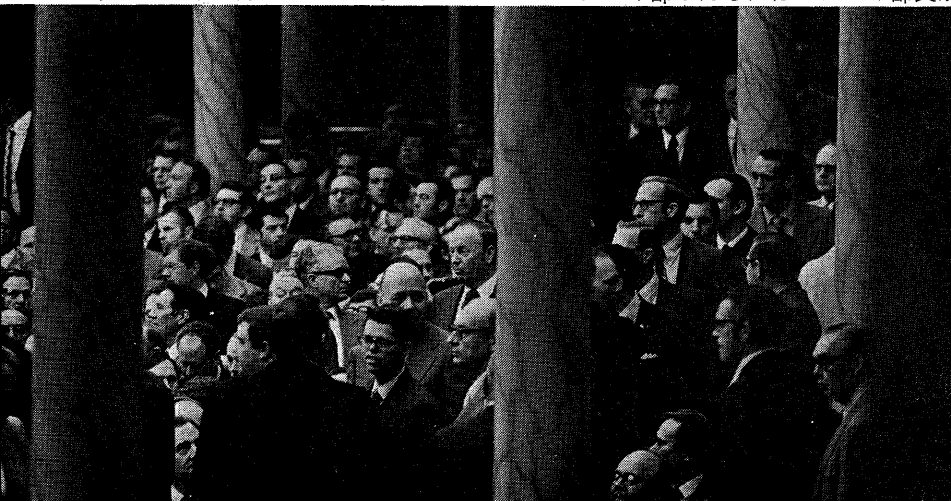
最後に教義と聖約から聖句を読んで、その中にある約束と定則とを確認したいと思う。

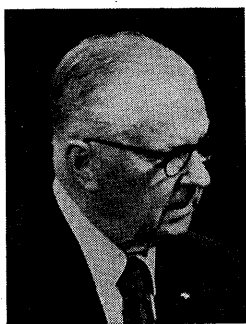
「誠に、主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに來り、わが名を呼び、わが声に従い、わが誠命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知ることあらん。」(教義と聖約93：1)

しるしを求めめる者ではなく、思いと心と体を清くして備える者となるよう勧めるものである。

主は言われた。「故に、汝らの心誠心誠意神に向わんがために、汝ら自ら聖くせよ。さらば、汝ら神を見るの時あらん。そは、神その面を汝らに現わすべければなり。而してそは神の時、神の欲するまま、神の旨によりて起るべし。」(教義と聖約88：68)

私は啓示が実際にあることを証する私はそれらをこれまで調べ試みてきた。この大会で私たちの前に座っている15人の教会幹部は、主イエス・キリストの特別な証人である使徒に召され、聖任された人々である。主が生きておられることを証する。イエス・キリストの福音は救いに至る力であり、また私たちは求めれば、これらのダイヤモンドが本物であることを知ることができる。これらをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。





救い主の使命

「主に心を向け、従順を
通して主の愛に報いる」

デルバート・L・スティプレー
十二使徒評議員会会員

愛する兄弟姉妹、友人の皆様、救い主は告げておられる。「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。」

（Ⅲニューフェイス11：10）「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう。」（ヨハネ8：12）

救い主の使命や教え、奇跡、贖いの犠牲、復活、永遠のみ栄に昇られたことについては多く書き記され、数多くの説教がなされている。キリストはまさしく私たちの主であり、救い主、贖い主、神である。主は言われた。「わたしが天から下ってきたのは、自分のところのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみところを行うためである。」（ヨハネ6：38）「……わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」（ヨ

ハネ10：10）「そして、……またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」（ヨハネ14：3）

ここに、この地上における救い主の使命の目的がある。すなわちそれは、私たちに永遠の生命を得させ、天において天父や救い主と共に住まわせるということである。

主は、私たちが永遠の生命に至る道を理解できるように教えを授けて下さった。また多くの奇跡を行なって、御自分がまさしく神の御子であるという証と証拠を示された。御自分の命を捧げるという贖いの犠牲は、主の全人類に対する偉大な愛を示すものである。救い主はこう言っておられる。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」（ヨハネ15：13）主は御自分が私たちの友であることを証明してこられた。だが、私たちはどうであろうか。祈りの時間を取り、救い主について知るための、また自分自身を救い主の友とするための勉強に時間をさいてきたらどうか。J・G・スモールはこう書いている。

わが巡り合いしかの友
親切、誠実、思いやりに満ちて、
いと賢き助言者、導き手
力ある守り手なり。

わが巡り合いしかの友、
わが救いのため血を流し、息絶えぬ。
わが賜わりしは生命の賜のみならず、
友は自らを捧げたり。

わが巡り合いしかの友、
われを天のみ座へと導く
全能の力もて、
道を照らしつつ。

イエスが語りかけられた群衆の中に、足なえやつんぼめ、くらの人たちが

いたことを想像していただきたい。群衆は救い主に、救い主は群衆にと互いにあふれんばかりの愛を感じていた。群衆はイエスの語りたもうた慰めの言葉に深く感動し、喜びの涙を流した。同様にイエスも彼らの心に触れて、彼らに対する憐れみと慈悲の心に満たされた。主は群衆を見まわして、「汝らの中に今病める者あるか。その者たちをここに連れ来れ。汝らの中に足なえ、めくら、びっこ、かたわ、らい病人、癩えたる者、つんぼ、またはいかなる病にてもあれ悩める者は、その者たちをここに連れ来れ。われは……これらの者を医さんとす。

……汝らの信仰われが汝らを充分医すに足ると認む」と言われた。（Ⅲニューフェイス17：7、8）

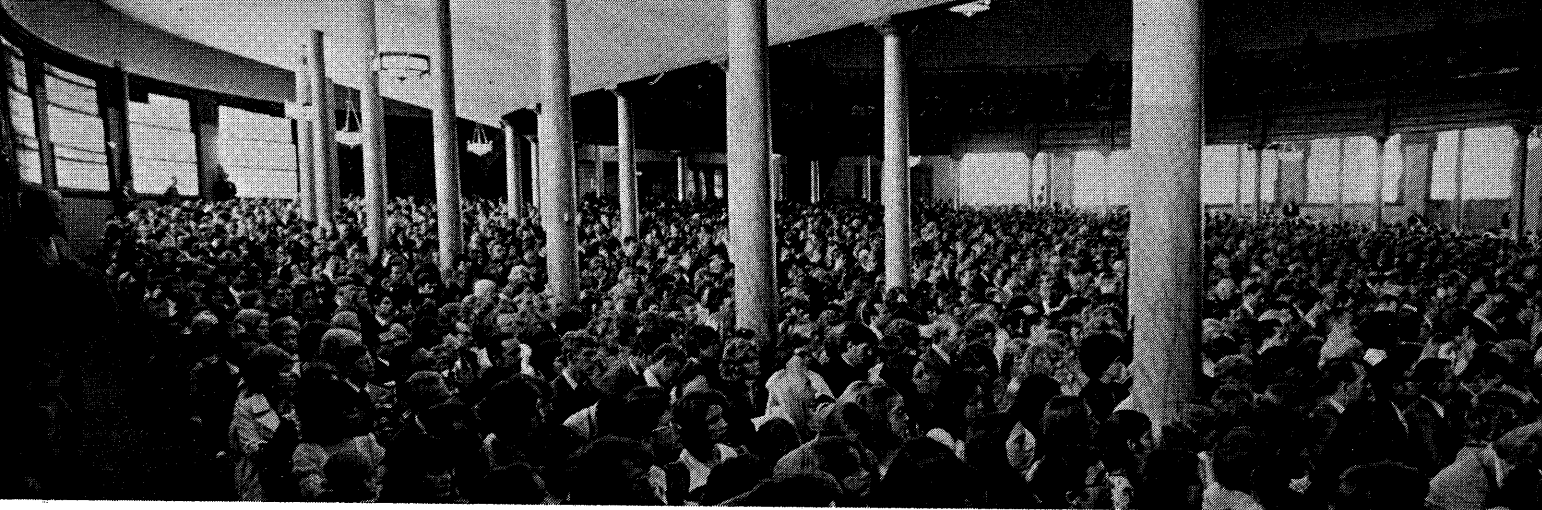
すると群衆は悩んでいる者、足なえ、めくら、おしの者たちを連れて来たので、イエスはその者たちを皆癒された。そこで病を癒された者も健康な者も、その場にいた者は皆感謝と賛美でひれ伏した。（Ⅲニューフェイス17：10参照）

それから救い主は御自分のまわりに子供たちを呼び寄せ、群衆に地へひざまずけと仰せになった。イエスは自らも地にひざまずいて御父に祈られた。その有様について記録は次のように語っている。「これを口で言いあらわせる者もなく、筆で書きあらわせる者もなく、また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。イエスが、私たちのために御父に祈って居りたもうのを聞いたとき、私たちの心に満ちた喜びは人間の想像ができないものである。

……イエスは御父に祈ってしまうと立ち上りたもうたが、群衆は喜びのあまり疲れてしまった。

しかし、イエスがかれらに……起てと命じたもうと、

……ここに於てイエスは『汝らはその信仰の故にさいわいなり。見よ、今



わが喜びは満ち溢れたり』とかれらに言って、

涙を流したもうた。……イエスはそれからかれらの小さい子供たちを一人一人近よせてこれに祝福を与え、かれらのために御父に祈りたもうた。

そしてこれをしてしまうとまた涙を流したもうた。」(Ⅲニーフエイ17:17-22)

私たちは、これらの善良で信仰厚い人々の美しい心とイエスが彼らに示された大いなる愛を悟っているだろうか。偉大な主なるキリストが自らの祈りの中で示された訓戒はここにあるのである。主は絶えず人々に関心を払うという模範を示しておられた。そして人々のために、また人々が特に必要としていること、個人個人が求めている事柄について祈っておられた。イエスは群衆に向かって勧告された。「されば汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず。

汝らの妻子が祝福を受くるよう、……家族の祈りを御父に捧げよ。」(Ⅲニーフエイ18:19, 21)

私たちは救い主のこの言葉を理解しているだろうか。救い主は御父に祈りを捧げ、病人を癒し、子供たちを祝福された。それと同様に、私たちにも援助を必要としている人のために祈り、妻子を祝福する権利を行使するようにと救い主は教えておられるのである。

そうすることは、私たちにとって単なる祝福であるばかりでなく、家族生活を守るすべとなる。私たちは、そのような霊的力を経験することによって互いの愛と一致をより一層緊密にすることができるのである。

もう一度この聖句を読ませていただきたい。「汝らはその信仰の故にさいわいなり。見よ、今わが喜びは満ち溢れたり。」(Ⅲニーフエイ17:20)

救い主の喜びが満ち溢れるのは、私たちが悔い改め、信仰を持ち、神の戒めを守るときである。

『『この故に、悔い改めて幼児のごとくわれに来る者は、われことごとくこれを受け容るべし。かかる者はすでに神の王国に居る者と同じなればなり。見よ、われはかれらのために一度わが生命を捨てて、また生命を得たり。故に世界の隅々に至る者たちよ。悔改めをなし、われに來りて救いを受けよ』と。」(Ⅲニーフエイ9:22)「その罪を悔い改め、わが名によりてバプテスマを受けんと願う一切の人々に、汝らは次の方法を以てバプテスマを施さざるべからず。」(Ⅲニーフエイ11:23)

福音の真髓、すなわち悔い改めと赦し、そして永遠の生命。ここにこそ救い主の贖いの犠牲の真の意味が示されているのである。

「このようにして、神は創世の前から定めた永遠の大みところを成就した

もう。このようにして、人の贖い救われることと亡びと不幸とは生ずるのである。

それであるから……来たいと思う者は誰でも来て生命の水を自由に無料で飲んでよろしい。また来たいと思わない者は誰でも来ることを強制されない。しかしこの者は終りの日にその行いによって報いを受ける。」(アルマ42:26, 27)

言い換えれば、その選択は私たちにかかっているということである。もし私たちが善をなせば、善なるものが返って来ようし、悪を働けばその報いとして不幸な有様に陥るであろう。主は私たちをことごとく救いたいと望んでおられるが、主のみこころを拒む者がいることも御存知である。救い主のその苦悶は次の聖句によく表われている。「ああ、エルサレム、エルサレム、……ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。」(マタイ23:37)

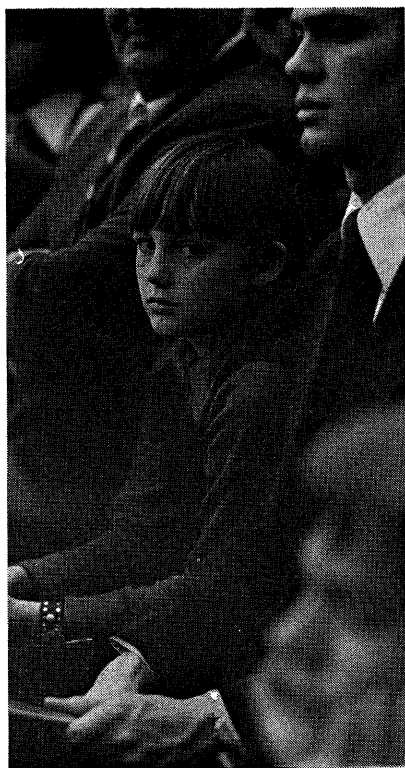
予言者たちもまた人々に、主のみ言葉に耳を傾けて悔い改めるよう叫んできた。「ああ罪惡を犯す人たちよ、浮世の無益な物を誇る人たちよ、義の道を知っていると人の前で言いながら、羊飼がこれまでも呼び現在まだ叫んで居たもうのにその御声に耳を傾けず、あたかも羊飼のない羊のように迷って

いる者よ」(アルマ5:37)

良い羊飼ひ、主なるイエスは、私たちに愛と憐れみを抱いておられるので、一人一人を招いておられる。主は罪を犯した人を赦してくださる。主は人が救われることをお喜びになるからである。

私たちが救いを得、昇栄に至るために救い主が払われたその犠牲に対して私たちは決して完全な恩返しをすることはできない。私たち一人一人の義務は、自らの心と生活を吟味して、主がいかに慈悲深く思いやりのある御方であるかを心に深く思い計ることである。ジョージ・ハーバートは言った。「いと恵み深き主よ、願うは一つなり、われらに感謝の心を与えたまえ。」

先週、私はある婦人から手紙をいただいた。中にはこのように記してあった。「私たちは天父を心から愛しております。もし私が残りの生涯全時間を捧げたとしても、私は主がお与えくださったこの貴い福音に対して主にお返しをすることはできません。



ベンジャミン王は民への説教の中で次のように述べている。「……今一度これをお前たちに言おう。お前たちがもしも神の栄光を知り、……罪の赦しを受けているならば、……神の偉大なことと、自分が役立たずで何のねうちもないことと、……自分に神が恵み深く辛抱強くましますこととを忘れずに思い起して低くへりくだり、毎日毎日主の御名によって祈り、……将来のことを確く信じて変らないことを望む。

もしもお前たちの行いがこのようであるならば、お前たちはいつも喜び、神の愛に浴し、……お前たちを造りたもうたお方の栄光、……をいよいよ深く知るようになる。

またお前たちは互いに傷つけ合う心がなく、安らかに暮して、あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うようになる。

またお前たちは、自分の子供らを飢えさせたりはだかのまま置いたりはないであろう。またお前たちは自分の子供らが神の律法に背き…を許さず、

お前たちは自分の子供らに真の道を行う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し助けねばならぬ事とを教えるであろう。」(モーサヤ4:11~15)

義しい行ないをしようと努力しているとき、私たちはしばしば試練に遭って悩む。しかし主はこのような慰めを与えておられる。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。」(マタイ11:28, 29)

「われは世の光にしてまた世の生命なり。われはアルパにしてオメガなり、始めにして終りなり。

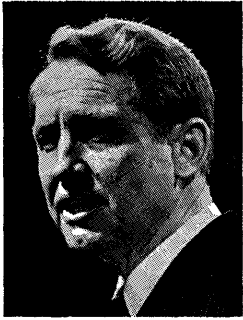
われがこの世に来れるは、世の人に

贖いと救いとを与え、また世の人を罪より救うためなり。」(Ⅲネーファイ9:18, 21)

「そして、……またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ14:3)

さて、今は私たちがこの大いなる約束を成就するために準備をなし、ふさわしい者となる時期である。多くの人は物事に対する正しい価値感を失い、霊に関わる進歩を犠牲にして富を追いかけている。あらゆる仕事、義務、責任を手がけるに当たって、私たちはまず、神の御子ならどうされるかということを考えてしなければならない。主であり救い主であるイエス・キリストは、私たちに永遠の幸福を得る道を示して下さっている。私たちは皆、自らの救いと栄光を主の功德に頼らなければならないのである。私たちに永遠の幸福を得る道を示して下さっている。

神の偉大なる生命と救いの計画の中にあってキリストが実に生きておられる御方であることを証する責任を持つ者として、私は人の霊は決して滅びることがなく、この現世を越えて生き続けるということを心から証するものである。また私は、神が生きておられ、その御子イエスが生きておられること、私たちが教えている福音は真実であることをへりくだり証申し上げる。また愛するスペンサー・W・キンボール大管長は神から召されていることを証する。私は大管長にこの上ない愛と尊敬と賞賛の心を抱いている。私は大管長を支持し、助け、また従って行きたいと思う。なぜなら、私は彼が今日主の民のために油注がれた方であることを知っているからである。神が私たち一人一人を祝福したもうて、私たちが主と交わした誓約に正しく忠実であるように。イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈るものである。アーメン。



証の力

信仰と忍耐を伴う証が 昇栄をもたらす

七十人最高評議員会会員
ハートマン・レクター・
ジュニア

私たちはこのすばらしい靈感に満ちた大会で、新しい預言者を支持した。それは必要である。神の戒めだからである。当然のことだが、このみ業はなお進み行く。私たちは預言者に従わなくてはならない。

「あなたの教会の基本原則は何ですか」と聞かれたときの預言者ジョセフ・スミスの返答に、証の重要性についての簡潔な言葉がある。彼は言った。

「教会の基本原則は、イエス・キリストが死んで葬られ、3日目によみがえって天に昇られたと言う、使徒と預言者の証である。私たちの宗教のその他すべては、それに付随するのみである。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith 「預言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P. 121)

証とは、ロムニー副管長が今朝言わ

れたように、聖霊の啓示によって得られる、福音が真実であるという確かな知識である。そうであるならば、それは造り主と交わりたい者にとってきわめて重要である。証は実に大切である。しかし、証は真の霊的進歩の初まりとはいえ、証だけで人が救われるのではない。

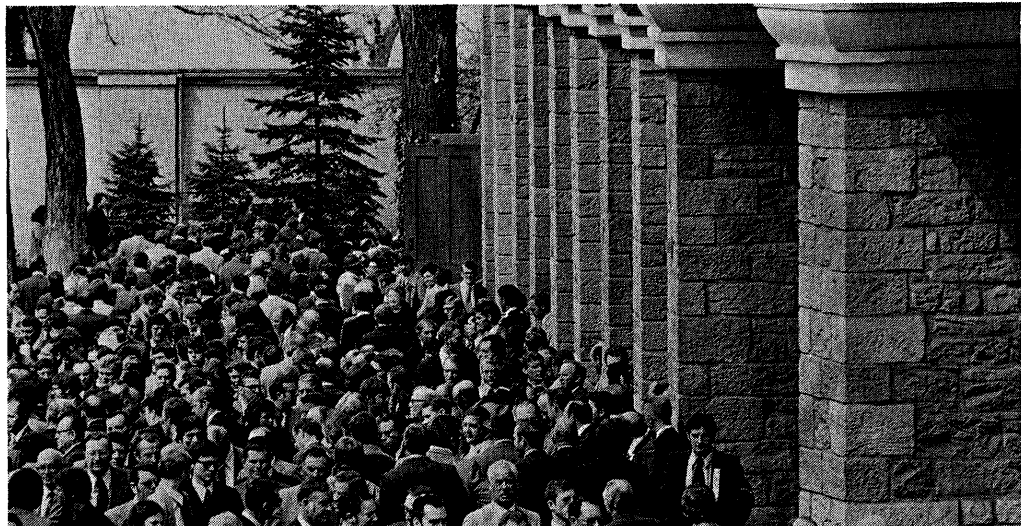
証が完全な改宗を意味すると思うのは、よくありがちな誤りである。私たちは何度も証を信仰と同一視してしまう。強い証を持っていると言うつもりで「彼は強い信仰を持っている」と言ったり、大きな信仰があると言うつもりで「彼の証は強い」と言ったりする。しかし、私はこのふたつが常に同義だとは考えない。信仰は知識に基づく。それはまだ見ていない本当のことを待ち望むことである。(アルマ32:21参照) 一方、証とは啓示された知識である。

証を述べるとは、自分が真実であると知っていることを証言することと比べられる。私たちが証を述べていることの多くは、実は、証ではまったくない。それは公に感謝を述べる

ことにほかならない。感謝するのは良いことである。しかし、感謝を公にすることは証ではない。証は聖霊から来る。ヨハネが証しているような、「すべての人を照すまことの光があって、世に来た」(ヨハネ1:9) そのキリストのみたまは、人をキリストに導き証を得るように助け、従ったならば人をイエス・キリスト教会へのバプテスマへと導くのである。

多くの人が、自分はイエスがキリストであるという証を受けたと思い、それだけで救われると考えている。彼らは、「自分は救われた」と言うのである。だが無論のこと、それは違う。証は天の軍勢の3分の1を救いはしなかった。ヤコブは記している。「……悪霊どもでさえ、信じておののいている」と。(ヤコブ2:19) 悪霊どもは何を信じているのだろうか。イエスがキリストであることをである。実際彼らはそのことを知っている。

ペテロはイエスがキリストであると証を持ち、それを述べた。その証は確かに主から来たものである。救い主は、「あなたにこの事をあらわしたの



は、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」(マタイ16:17)と言われたからである。ペテロが当時改宗していたかどうかは、きわめて疑わしい。なぜなら、自分の命が危くなったときに、主イエス・キリストを知っていると認めることができなかったからである。その後、救い主は苦悩と十字架の死に赴く直前、ペテロがまだ改宗していないことを知り、こう言われた。「…それで、あなたが立ち直った(改宗した)時には、兄弟たちを力づけてやりなさい。」イエスがキリストであるというペテロの知識と証は、救い主を否むことから彼を「救い」はしなかった。おそらく、改宗していなかったためであろう。ペテロは命が危機に瀕したときに、主に従わなかったのである。

私たちが改宗したならば、油注がれた主のしもべを支持し、従い、彼らと一致する自分を見いだすはずである。それが、改宗のひとつの確かな印である。しかし証を持つ多くの人に、それができなかった。この神権時代の人の名を2、3あげるだけでも、マーテン・ハリス、デビッド・ホイットマー、オリバー・カウドリ(モルモン経の三人の見証者)、トーマス・B・マーシュ(十二使徒定員会初代会長)にその問題があった。彼らは主の油注がれたしもべを支持することを拒み、それが教会から追放される原因となった。

改宗には変化も含まれる。ベンジャミン王が言うように、改宗とは利己心、高慢、あせり、不節制、不従順、反抗心などの「肉欲に従う人」を捨て「主キリストの身代りの贖罪に由って聖徒となる」ことである。これは「幼児のように従順で柔和で謙遜で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従する」ことをも意味する。(モーサ

ヤ3:19)

イエスはこのことを強調して、「…『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである」(マタイ7:21)と言われた。

イエスは御父からみ旨を行なうようにはっきり命じられ、私たちもイエスに従って御父のみ旨を行なうように勧告されている。本当に改宗した人々は御父のみ旨を行ないたいと望む。では私たちはどのようにして御父のみ旨を知るのだろうか。その知識は啓示によって御父から直接に来ることがあるが、それはまれである。御父に代わってことを行なう権威あるしもべたちがいるとき、私たちはたいがいそのしもべたち、すなわち大管長、教会幹部、ステーキ部長、監督、支部長、言い換えれば主の油注がれたしもべたちを通して、御父のみ旨を知るのである。このように、主の油注がれたしもべを支持しなくてはならないことははっきりとしている。もし私たちが真に改宗していたなら、彼らしもべと一致する自分を見いだすであろう。それが真の改宗の印であり、御父のみ旨を行なうことなのである。

父なる神が直接人に語られた例は、世界の歴史にはほんの数回しか記録されていない。語るの、たいてい主イエス・キリストである。キリストは旧約聖書のエホバである。キリストには御父の代理として話す権威が与えられていた。しかし、御父が話していることが判然とする例は幾つか記録されている。ヨルダン川でイエスがヨハネからバプテスマを受けたときに、御父の声が聞こえ、変貌の山でも再度み声が聞こえた。そして、1820年ニューヨーク州パルマイラ近郊の森で、預言者ジ



ョセフ・スミスはまたも御父の声を聞いた。その声はみな、御子イエス・キリストを紹介するか、証をするものであった。

しかしながら、御父のみ言葉が預言者によって私たちに与えられた例は、記録に残されている。その数例はモルモン経の中にある。モルモン経については、預言者ジョセフ・スミスがこう証した。「モルモン経は地上で最も正確な書物であり……人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である」(*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第4巻[英文] P.461)

私がこれから引用しようと思う聖句の中で、預言者ニーファイは、イエスが「すべての正しいことを成就する」ためにヨハネからバプテスマを受けなくてはならなかったわけを説明している。彼は、キリストが「天の御父の前にへりくだることと、天の御父に従ってその命令を守ると証明をすることとをバプテスマによって……示し、……人のふむべき道が真直ぐであることと人のくぐるべき門が狭いこととを世の人に教えたもうのであって、子羊は自分から世の人の前にバプテスマを受ける模範を示したもうた」、またそのあとで「われに従えと世の人に仰せになった」と述べている。(Ⅱニーファイ 31:6—7, 9—10)

ニーファイはこう尋ねた。「……それであるから私の愛する兄弟たちよ、もしも喜んで天の御父の命令に従わないならば、私たちはイエスに従うことができるか。」(Ⅱニーファイ31：10)そして、御父の教えをこう記録している。「……悔い改めよ、悔い改めよ。わが愛子の名によりてバプテスマを受けよ。」

「また御子の声が『天の御父は、わが名によりてバプテスマを受くる者にはわれと同様に聖霊を与えたもう。故にわれにならいて、汝らの見たるわれの行いを汝らもせよ』と私に聞えた。」(Ⅱニーファイ31：11—12)

さらに、ニーファイは御子の声が次のように聞こえたと言っている。

「……汝ら一旦その罪を悔い改め、水のバプテスマを受けてわが命令を喜んで守ることを天の御父に証明し火と聖霊のバプテスマを受け、新しき言葉なる天使の言葉にて語ることを得るに至る後われを否定するよりは、むしろ始めより汝らのわれを知らざりし方よし。」(Ⅱニーファイ31：14)

そしてその後、御子を証する天父の言葉をこう記録している。

「私はまた天の御父が『わが愛子の言うことは真実にして確なり。終りまで忍ぶ者は救われん』と仰せになる声を聞いた。」(Ⅱニーファイ31：15)

さて、父なる神が子供たちに与えたもう最も大事な教えとは、明らかにこれである。悔い改めて、イエス・キリストの御名によりバプテスマを受け、終りまで耐え忍ぶこと。これが御父のみ旨であり、子らに望んでおられることである。真の改宗の印は、耐え忍ぶことである。終りまで耐え忍ぶ者のみ、偉大な永遠の贖いの計画が実現される。

預言者ジョセフ・スミスは油注がれ



た主のしもべのあら捜しをしたり、反抗したりすることの危険性を指摘しているが、その言葉は実に意味深い。

「私はあなたがたに王国の奥義の(鍵の)ひとつを教えよう」預言者は語った。「それは、永遠の世々から神と共に存在してきた永遠の原則である。教会を非難し、自分は正しくて他人が道をはずれていると言ひ、反抗して他人を責める者は、しかと知るがよい。彼は背教への道にある。もし悔い改めなければ、神が生きておられるごとく確かに彼は背教者となるであろう」(教会歴史記録「第3巻」〔英文〕P.385)

そうであるとすれば、油注がれた主のしもべを支持し、従うのを拒むことはある種の反逆であり、神の権能に故意、公然と反抗し、拒否することである。それは重大事である。反逆は従順の正反対で、王国からの放逐を招くものである。ルシフェルはそれを経験した。彼は、自分が見た御父の行ないをしようとせず、主を支持することを拒んだ。

どうすべきかを知っていながら行なわず、バプテスマの水に入って誓約を交わしながら、目の前に光を持ちつつも従うことを拒んだならば、そのとき私たちは謀反者となる。反逆をむしろ楽しみとしている風の人々もいるのである。彼らはそれを自慢する。背くすべての人に主の怒りが燃えること(教義と聖約63：2)や大いなる悲しみに刺し貫かれ、行為があばかれること(教義と聖約1：3)を知りさえすればよいものを。

この世の試しの時期に、改宗した人々は成功を収める。王国は衰微に向かいはいはしない。それは、人手によらず山から切り出されて、勢いを増しながら山腹を転がり落ちた、あの預言者ダニエルの見た石である。その石はほかの王国を打ち破り、全地に満ちて永遠に栄えた。

神の王国は勝利者である。勝利者の側につくのはすばらしいことではないだろうか。あなたは勝利者を好まないだろうか。私は好む。実の所、私は負



けずぎらいである。私は自分を、世界一あきらめの悪い敗北者であると思う。敗北は信じたくない。ある人々は、勝ち負けではなく、いかに闘ったかが問題なのと言う。あなたは考えないだろうか、勝つと負けるとでは大違いである。私たちはこの地上へ勝つためにやってきた。主に堅くついていれば勝利を収めるであろう。なぜなら、主は負けはしないからである。主は負けるはずがない。王国は勝利者であり、私たちが王国の道を歩むならば、主は共に勝利を収めるであろう。「……終りまで忍ぶ者は救われん。」(Ⅱネーフアイ31:15) この約束は確かである。

証は私たちを救いはしないが、信仰や、忍耐をも含む改宗を伴った証は、私たちを昇栄に導くのである。

救い主のみ言葉に耳を傾けよう。

「この故に汝らは主の代理人なれば主の用向を有てる者なり。されば、何事にまれ主の意に従いて汝らの為すところはすなわち主の業務なり。

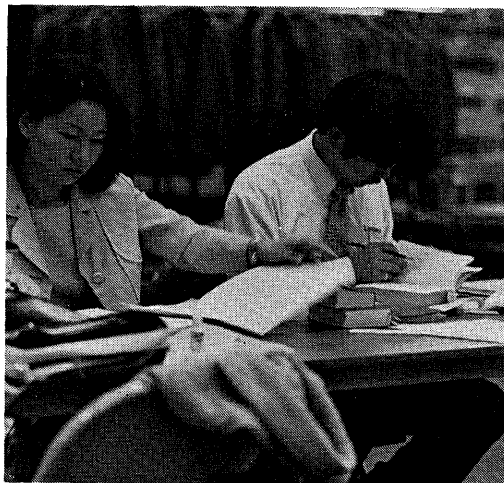
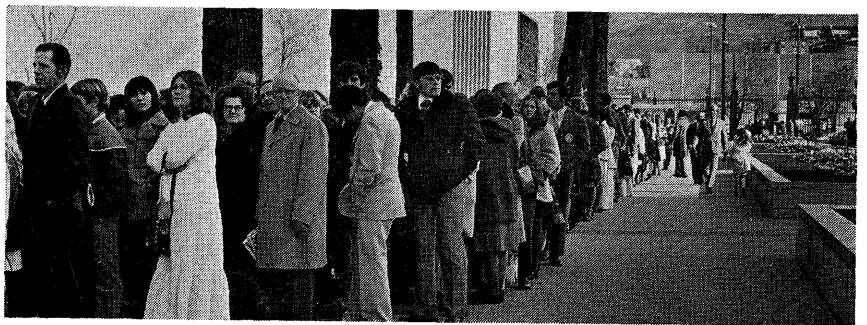
この故に善を為すにうむことなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。それ、小なる事より偉大なる事起る。見よ、主は真心と喜びて事に従う精神とを求む。喜びて従順に従う者たちは、この末の世に於てシオンの地の善きものを食わん。而して叛く者たちは、シオンの地より断ち切られて外に追い出され、そ

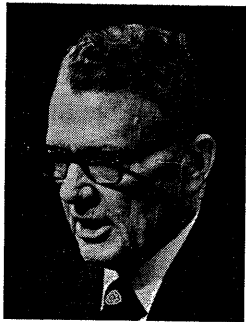
の地をつぐことなからん。われ誠に告ぐ、叛く者たちはエフライムの血筋にあらず、この故に彼らは抜き捨てらるべし。見よ、主なるわれはこの末の世に於て、わが教会をある小山の上、すなわちある高き所に坐せる一判事の如く為して諸々の国民を審かしむ。およそシオンに住める民は、シオンに関するあらゆる事を審くべし。およそ偽る者、偽善者たちは彼らによりて証明され、使徒にして預言者にあらざる者たちも彼らによりて知らるなり。およそ判事たる監督およびその副監督たる者たちも、もしその管理人の職に忠実ならずば罪ありとせられ、他の者代りてその地位に置かれん。見よわれ汝らに告ぐ、シオンは繁栄して主の栄光そこに留らん。而してシオンは民の旗標となり、民は天下の万国より此所に集り来るべし。而して万国の民シオンの

怖るべきによりておののき、シオンの怖るべき者たちによりて怖るる時至らん。主この事を語れり。アーメン。」(教義と聖約64:29, 33—43)

あなたはこれを敗北者と見るだろうか。そうではないと申し上げたい。改宗した人、主と主に油塗られたしもべたちに従うことのできる人、彼らこそは神の目的を実現させる人々である。神の王国の立派な指導者となる前に、あなたはまず立派な従者とならなければならぬ。従順は犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。(サムエル15:22参照)

主に油注がれたしもべたちに従うとき、私たちが常に固く立ち忠実でいられるように主が祝福されんことを。また、私たちがそこに安らぎを感じられるように。そのことを、イエスのみ名により祈るものである。アーメン。





「わたしは恵みを あなたがたに注ぐ」

什分の一を払うことは、私
たちの信仰と忠実さをはか
る試しである。

十二使徒評議員会補助
ヘンリー・D・テイラー

物価ならびにサービス業の値上げに伴って、インフレはますます進行し、止まるところを知らない。これら諸物価の上昇は多くの人に影響を及ぼし、とりわけ定額所得者やその家族の生活は一段と厳しいものになっている。限られた収入に対して需要が多く、そのため家計の調整を余儀なくされている。

二十数世紀も昔、主は預言者マラキを通じてこの問題を解く公式を与えておられる。「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ 3:10)

私たちはしばしば、「私には什分の一を払うだけの余裕がない」という言葉を耳にする。だが、このようなことを口にする人は、自分たちに余裕がな

いのは什分の一を払わないからだということ、まだ理解していないのである。経験から、多くの教会員はこう証する。主の恵みを得て残り十分の九を慎重に計画し、予算をたて、知恵を用いて使うことは、十分の十全部を感謝の念もなくただ無計画に使ってしまうよりはるかに祝福が多いと。

什分の一を支払うことは、私たちの信仰と忠実さをはかる試しである。数十年前、ジョセフ・F・スミス大管長は次のように勧告された。「この原則(什分の一)によって、この教会の民の忠誠が試されるだろう。この原則によって、誰が神の王国にふさわしく、誰がふさわしくないかがわかる。」(ジョセフ・F・スミス、「福音の教義」第1巻P.271)

しばしば、「什分の一とは何か」という質問が聞かれるが、かつて教会の管理監督だったジョセフ・L・ワースリンは、それについて明確な定義を下している。「什分の一とは、その言葉通りまさしく十分の一そのものである。給与所得者の場合は全給与の十分の一、事業所得者は収益の十分の一がそれである。農家も同じく実収入の十分の一であり、また農家の場合、家族の生計をささえるために使用した農産物の十分の一も含まれる。公正にみて当然要求されるものなのである。なぜならその他の人は、家族を養うに必要とされる食物等を実収入で賄っているからである。投資をしている場合はその配当金の十分の一であり、またすでに保険料に対する什分の一を納めているならば、掛けた保険の還付金から納めた保険料を差し引いたものの十分の一となる」(「大会報告」〔英文〕1953年4月P.98)

歴代、教会の大管長は、什分の一を払うことは全く個人的なものであって自ら進んで捧げるものであると説明してきた。教会初期の大管長ブリガム・

ヤングは、聖徒たちにこう教えている。「私たちは、進んで什分の一を払おうとしない人に、什分の一を払うよう求めはしない。ただあなたがたが什分の一を払おうとするときは、正直に払いなさい。」(Brigham Young on Tithing「ブリガム・ヤング、什分の一を語る」〔英文〕インプルーブメント・エラ、1941年5月P.282)

後年、グラント大管長は次のような言葉をもって民に勧告している。「主は月に一度、紙幣を集めて回る集金人を送られてはいないし、私たちに勘定書を送ってこられることもない。主は私たちに信頼しておられるのである。私たちは主の代理人であり、自由意志を与えられている。」(ヒーバー・J・グラント「什分の一の面接」Settlement〔英文〕インプルーブメント・エラ、1941年1月P.9)

什分の一は、所得あるいは利益を得た時点で払うことに価値がある。ただ農家や自営業については、通常その収益を年間で計算しなければならないであろう。長年の経験と観察から、グラント大管長は再び次のように勧めている。「什分の一の支払いはその季節ごと、つまり収入を得たときにすると容易に支払うことができる。毎月什分の一を払っている人は、それを年末まで引延ばす人よりも、はるかにたやすく払っている。」(ヒーバー・J・グラント「什分の一の面接」〔英文〕P.9)

什分の一の律法は戒めとして主から与えられたものである。私たちはこの律法と戒めを守るとき、約束された祝福にあずかることができる。主は言われた。「汝らわが言うところを行わば主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約 82:10)

教会のまだ日が浅い頃、ひとりの善良で忠実な女性がいた。殉教した大祝

福師ハイラム・スミスの未亡人、メアリー・スミスである。彼女は主の約束を強く信じていた。息子のジョセフ・F・スミス、孫のジョセフ・フィールディング・スミスは共に教会の大管長となっている。ジョセフ・F・スミス大管長は、10歳のとき起きた出来事を次のように語っている。

「私はまだ子供の頃に起きた出来事がありありと記憶している。私の母は未亡人で、大勢の家族を養わなければならなかった。ある年の春、じゃがいもの貯蔵所を開けると、母は一番良いじゃがいもを私たちに持たせて、什分の一を納める事務所へ行った。その年じゃがいもは不作であり採れなかった。当時私はまだ小さかったが、荷馬車を走らせて行った私たちが什分の一の事務所の階段を上がって行って、じゃがいもの荷物をほどこうとしていると、ひとりの書記がやって来て母に言った。『スミス姉妹、未亡人のあなたが什分の一を納めなければならないなんてあんまりだ。』……彼は、母が什分の一を納めることを叱って、母に賢明でないし分別もないと言った。そして、什分の一の事務所から生活をささえられている人で、もっと強く働くことのできる人がほかに何人もいると言った。母はその人に向かって、きっぱりと言った。『ウィリアムさん、あなたこそ自分のことが恥ずかしくないのですか。あなたは、私から祝福を取り上げようとするのですか。もし私が什分の一を納めないなら、私は主が祝福を下さらないことを覚悟しなければなりません。私が什分の一を納めるのは、それが神の律法であるからだけでなく、納めることによって主から恵みをいただきたいからです。この律法や他の律法を守ることによって、私は富める者となり、家族を養っていけるようになると思っていますのです。』（「大会報告」1900年4月、P.48）

私は今、1948年10月にこの歴史的なタバナクルで開かれた半期総大会を思い出している。そのとき、十二使徒評議員のマシュー・カウリー長老が話しておられた。私は、カウリー長老が話されたひとつの出来事に深い感銘を受け、それは今でも心に残っている。カウリー長老はニュージーランド伝道部の伝道部長として働いていたとき、ひとりの善良なマオリの姉妹を訪れた。この姉妹は什分の一の原則を心から信じ、忠実に守っていた。カウリー兄弟は、その時の経験をこのような言葉で語った。

「さて、私はあるとき、その近隣を訪ねるときはいつもしているように、この小柄で気品のある婦人を訪れた。年は80を越え、目が見えなかった。彼女は教会の支部がない所に住んでいて宣教師が訪問する以外に神権者と会うことはなかった。当時、宣教師はいなかった。戦争のため引き揚げていたからである。

私は彼女の方に歩み寄り、マオリの方法で挨拶をした。彼女はかすかな火をたよりに裏庭に出ていた。私が手を差し出して握手をし、ほほずりしようとすると、彼女は『私と握手をしないでください……』と言う。

私が、『おや、見事に手が汚れていますね。でも私は喜んであなたと握手がしたいのです。そうしていただけませんか』と言うと、

『まだできません』と言う。それから彼女は四つんばいになり、彼女の小さな家の方にはって行った。そして家の角に置いてあったくわを手にとると今度は距離を測りながら別の方向にはって行った。目当ての場所にたどり着くと、彼女は手にしたくわで土を掘り始めた。そして何かかたいものにおづかる音がした。両手で土をかき出し、果物つぼを取り出した。彼女は果物つぼをあけると、中に手を入れて何かを



取り出し、私に渡した。それはニュージーランド貨幣であった。アメリカ貨幣に換算すれば、おおよそ百ドルに相当したであろう。

彼女は言った。『これは私の什分の一です。さあ、これで神の神権者と握手することができます。』

『あなたはこんなに多くの什分の一を納めなくてもよいのです。』

『ええ、そのことはわかっています。今、それを納める義務はありませんが、前もっていくらかでもお支払いしておきたいのです。神の神権者がこちらにまたいつ回って来られるのかわかりませんので』と彼女は答えた。

ここまで話すとカウリー兄弟の声は途切れ、深い感動をこめて語った。

『そのとき私は体をかがめ、額と鼻を彼女の額と鼻に押しつけた。私のあふれる涙が彼女のほほを漏らした。…』（「大会報告」1948年10月、P.159, 60）

愛する兄弟姉妹の皆様、主は必ず約束を守られる。主は誠に、忠実で主の戒めに従う者に天の窓を開き、恵みを注いでくださるのである。しかしそれは主の方法によって与えられる。祝福は金銭的なものかも知れないし、一時的なものかも知れない。また靈感あふれる経験、力や平和、慰めがもたらされることによって気づくこともある。主がお与えくださる祝福は、たとえその時点で祝福だと認められないことがあるにせよ、不思議な思いもよらない方法でもたらされる。主の約束は守られるからである。

これらを主であり、救い主であるイエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

十二使徒L・トム・ペリー長老のお話

わたくしは今日、みなさんと一緒にこの世の最初の両親について考えてみたいと思います。エデンの園を離れてから、この二人を神様がどのようにお導きになったかを読むことは、興味あることです。当時、読むべき本はありませんでした。指導者もいませんでした。またこの二人には教えてくれる両親もいませんでした。それゆえ、導きを受けるために、まったく主により頼まなければなりません。モーセの書の中には、この二人が自分の家族に対して行なった5つのことが書いてあります。

「われ主なる神、アダムとイヴを追ひ出してより、アダム先にわれ主の命じたりし如く、土地を耕しすべての野の獣を治め、彼の額の汗によりて食物を食うことを始めたり。」(モーセの書5:1)

その次に、非常に大切に興味あることが書いてあります。「而して、妻なるイヴもまことに彼と共に働きたり。」(モーセの書5:1)最初の両親は二人で共に働くという模範を私たちに残しています。このことからおわかりになると思いますが、妻なるイヴもまことに彼と共に働いたのです。アダムの前に立って働くのではなく、後になって働くのではなく、「サイド バイ サイド」すなわち並んで共に働いたのです。

お互いがこのようにして共に働く最初の夫と妻の姿はなんと偉大なことで



しょう。主は彼らを祝福したもうて、やがて息子、娘らが生まれました。そして、子供たちが増えて地を満ち始めたのですからこの二人は人類のために努力したのです。主のみ前から断ち切られていましたので、二人がどのようにして主と意志の疎通を計ったのか見てみましょう。モーセの書に2人が主を呼び求めた様子が書いてあります。

「アダムとその妻イヴ主の御名を呼びたるに、エデンの園を指して行く途のかなたより声聞えて彼らに語りたまえるが、その御顔は見えざりき。そは彼ら主の居りたもう所より締め出されたればなり。」(モーセの書5:4)

この聖句に私たちは神様からの指示を受ける方法を学びます。主の御名を呼んで主が私たちを指導して下さるよう求め、その指導に身を投ずることです。

二人が主を呼び求めた時、主はその祈りに答えて彼らを導きました。何をなすべきかをお教えになりました。またアダムは主の誠命に忠実であったと

記されています。

主がおっしゃったようにアダムとイヴは歩みました。モーセの書5章12節に「アダムとイヴとは神の御名を讃め息子娘らにすべての事を知らしめたり」と書いてあります。夫婦二人して、両親二人して自分の子供たちに神様のことを教えなければならないことが、このことからわかります。

また主は二人の家族をどのように組織したらよいのかとか、父親や母親の責任についても語っておられます。二人がそれぞれ自分に与えられた責任を果す時は、家族は正義の中で進歩しました。私たちは父母として自分の子供たちに何を教えるべきでしょうか。教義と聖約88章の119節には次のように書いてあります。

「汝ら組織して必要なる物をことごとく調べよ。而して、祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家なる一つの家を建つべし。」

すべての両親は、自分たちにとって大切な聖句を書き出し、みんなの前にかかげておく必要があると思います。聖典を書き出しおくことによって、家族に教えるべきことがわかりやすくなってきます。

わたくしは今日、みなさん方に神の家をよく打ち建てるよう勧告します。まず神権によって祝福されている神の家をお建てになるよう勧告します。お父様が家長として、その家庭に立つの

です。同じ考えで家族をよく薫陶できるように、奥様がそばに立って同じように夫を助けるのです。

数年前、わたくしがステークス部長会の一員であった時、主がお示しになった方式にのっとることのできない一つの家族がありました。お父さんは教会に活発ではありませんでした。それでお母さんが家族の指導にあたりました。毎月証会にこの奥さんがいらっしゃって証をなさいました。ほんとに、私の主人が活発になってくれたらと、証されました。それで神権指導者は、彼女の願いが叶えられるように努力しました。彼女のご主人にいろいろ働きかけてみることにしました。数カ月後に、彼は教会に来るようになりました。やがて長老に按手聖任されました。教会の長老になるよう私たちが彼の頭に手をおいた時、家族はほんとうに喜びました。彼は神権者になりました。そして責任のひとつとして家族を指導する責任を感じました。ところが奥さんはご主人が指導することにあまり賛成ではありませんでした。奥さんは続けて家族を指導したかったのです。やがて家族の中に葛藤が起こりました。

二つの頭を持つことは出来ません。神権を持つお父さんが家庭を管理すべきです。奥さんはその横に立って、ご主人を助け、支え、支持すべきです。葛藤がますます激しくなったので、やがてお父さんは指導することをあきらめるようになりました。お父さんは再び不活発になりました。お母さんが不自然な指導を自分で行なったのです。家族は文字通りちりちりばらばらになりました。離婚がおこり、子供たちはみんな家庭から離れました。

私はこのことからいつもこう思っています。正しい方式に従わないで管理される家庭は、やがて不幸を招くということです。主は私たちに家族は永遠

に続くとお教えます。しかしそれは族長の方式に従ってはじめて永遠に続くのです。このことは最初の両親であったアダムとイヴに教えられました。当時は、いわゆる政府というものはありませんでした。族長政体で族長が治めたにすぎません。もし主がそのような族長政体で永遠に私たちをお治めになるのであれば、わたしたちはこの地上ですでにそれを会得しておくべきでしょう。わたしたちは自分の家族を正しい原則に基いて導かなければなりません。

正しい家庭をつくる要素について、少し考えてみましょう。子供たちに、わが家が祈りの家であるように教えてください。主のために、どのように自制することができるか教えてください。イエス・キリストの福音に深い永遠の信仰を持つように教えてください。もっとも良い教育は父と母から受けられます。その他の言いかげんな教えに惑わされないように教えてください。自分の家を栄光の家、礼拝の家にすることができるよう子供たちに教えてください。自分の家を主がなさるような秩序の家にしよう子供たちに教えてください。このようなことがらが行なわれるならば、みなさん方は神の家に住んでいることになるのです。

兄弟姉妹のみなさま、今を去る6カ月前にわたしの生涯で最もすばらしい出来事がおこりました。私は預言者とその二人の副管長、および十二使徒会の方々と一緒に神殿の上の方の部屋に行くように呼ばれました。その天国のような部屋でわたくしは預言者から使徒になるように言われました。わたくしがそのような召しにどのように答えるかたずねられました。わたくしが、その時語る言葉はみんな記録されるにちがいないとわかりました。その時、私ははっきりとこの福音が真実のもの

であり、神様のものであることがわかりました。それが終るとわたくしは部屋の中央にある椅子に腰かけるようにいわれました。そして、預言者は手を私の頭におかれました。わたくしを現在の召しに聖任してくださったのです。この地上で、預言者でなければ、いかなる人間と言えどもこのような祝福を宣言することはできない、そう思いました。神様の靈感なくしてあのような宣言をすることはできないと思いました。その時以来、私の心から疑いというものがまったくなくなりました。神様が真に生きたもうということをはっきりとその時に知っていました。またイエスがキリストであるということとその時ははっきりと知っていました。また預言者であるスペンサー・W・キンボール大管長と救い主とをへだてているバールが非常に薄いものであるということがこの時にわかりました。

みなさん方の生涯で、このような改宗がおこる時、みなさん方は再び以前の自分と同じようになることはできないのです。生まれ変わったみなさん方は、今やみなさん方の同胞にこの福音を分ち合う責任があるのです。わたくしは今日みなさん方がその手を直角に上げて、ステークス部長を支持なさるのを見ました。日本の地においてみなさん方が自分の力のかぎりを尽くして主の王国をこの地に建設していただきたいと思います。もしみなさん方がそのようになさるならば、天の窓は開いて天父なる神の王国で奉仕する喜びと満足を得られるにちがいません。わたくしたちが天父なる神様の王国の建設にまい進できますように、イエス・キリストの御名を通してお祈りいたします。

(10月27日 日本東京ステークス部大会にて抄録)

日本東京ステーク部が 二つのステーク部に

10月27日、十二使徒L・トム・ペリー長老管理のもとに、日本東京ステーク部大会が東京第三ワード部において開かれた。この大会で1970年3月に組織された日本東京ステーク部は二つに分割され、新しく日本横浜ステーク部が誕生した。各ステーク部の範囲と役員は下記のように決定された。



(左は柏倉仁、右は菊地良彦各ステーク部長)

日本東京ステーク部

所属範囲、東京第1ワード部、東京第2ワード部、東京第3ワード部、東京第5ワード部、ひばりが丘ワード部、浦和ワード部、千葉支部、国立支部、朝霞支部、柏支部

ステーク部長	菊地 良彦
第1副ステーク部長	福田 真
第2副ステーク部長	岡本 亮

高等評議員	丸山 周兵
	丹羽 三吾
	八木沼修一
	井上 竜一
	赤松成次郎
	矢野 義高
	猪股 勝彦
	細谷 佐
	井上 正年
	神田 治
	高井 淳一
	福島 克明

日本横浜ステーク部

所属範囲 東京第4ワード部、横浜第1ワード部、横浜第2ワード部、町田ワード部、藤沢支部、八王子支部、小田原支部、川崎支部、南支部、杉田支部、平塚支部

ステーク部長	柏倉 仁
第1副ステーク部長	坂井 圭
第2副ステーク部長	浅間 玄也

高等評議員	相良 健一
	福井 弥
	小室 敬
	佐倉井正彦
	内山 雅宣
	塚田 豊雄
	渡部 正尚
	上野 道男
	和田 平助
	保坂 三郎
	宮下阿佐夫
	田中 靖也



扶助協会中央管理会長会の新任と解任
上：ベル・S・スパッフォード姉妹
左：左から ジャナス・R・キャノン教育担当
副会長，バーバラ・B・スミス管理会長，マリ
アン・R・ボイヤー第二副会長

扶助協会，初等協会の新管理会長会任命さる

これまで長年にわたり献身的な奉仕を続けてきた，扶助協会および初等協会の中央管理会長会会員が，このたび全員その任を解かれた。扶助協会の中央管理会長を務めたベル・S・スパッフォード姉妹および副会長のマリアン・クラーク・シャープ姉妹，ルイス・ウォーレス・マドセン姉妹は，1974年10月3日の扶助協会大会で，また初等協会のラバーン・ワッツ・バームリー管理会長および副会長であるナオミ・ワード・ランドール，フローレンス・リース・レーンの両姉妹は，第144回半期総大会の10月5日の集会で，それぞれ解任された。

またこれに伴い，両協会の中央管理会会員は全員解任され，新会員が支持された。

1945年以来扶助協会中央管理会長の職にあったスパッフォード姉妹は，心境をこう語っている。「人生を振り返ってみて感じることは，扶助協会から受けた恩恵があまりにも大き過ぎるということです。数々の機会に恵まれいろいろなこと

を経験し，祝福は数え切れません。主が私を深く愛して下さっていることを考えると，心からへりくだりたい気持です。」

扶助協会の管理会長として新たに支持されたのは，バーバラ・ブラッドショー・スミス姉妹で，教育担当副会長はジャナス・ラッセル・キャノン姉妹，ホームメーカー担当副会長はマリアン・リチャーズ・ボイヤー姉妹である。

バームリー姉妹はこの解任で，23年間にわたる初等協会中央管理会会長としての奉仕に終止符を打った。彼女は1941年に中央管理会会員に召され，次いで1943年には中央管理会副会長，そして1951年に管理会長に召された。

この全世界に及ぶ3歳から12歳までの47万1000名以上の少女の組織の新管理会長はナオミ・マックスフィールド・シャムウェイ姉妹である。シャムウェイ姉妹は，副会長としてサラ・ブロードベント・ポールセン，コリーン・ブッシュマン・レモンの両姉妹を選んだ。



初等協会中央管理会長会の新任と解任
上：ラーバン・W・バームリー姉妹
左：左から サラ・B・ポールセン第一副会長，
ナオミ・M・シャムウェイ管理会長，コリー
ン・B・レモン第二副会長

わたしは、もうひとりの御使
が中空を飛ぶのを見た。彼は地
に住む者、すなわち、あらゆる
国民、部族、国語、民族に宣べ
伝えるために、永遠の福音をた
ずさえてきて、大声で言った、
「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。
神のさばきの時が来たからであ
る。天と地と海と水の源とを造
られたかたを、伏し拝め」。

（黙示録14：6-7）